

HIMI HANDBALL ASSOCIATION

氷見市ハンドボール協会  
創立70周年記念誌

70th ANNIVERSARY





HIMI HANDBALL ASSOCIATION

氷見市ハンドボール協会  
創立70周年記念誌

70th ANNIVERSARY







氷見市ハンドボール協会会長  
**谷内口 数 尚**

## ごあいさつ

氷見市ハンドボール協会が創立70周年を迎え、記念誌を発刊するにあたり一言ごあいさつを申し上げます。

50周年記念誌をひもとくと、昭和22年に氷見高等女学校が第2回石川国体に出場したのが氷見におけるハンドボール競技の始まりであり、昭和29年、関係各位のご尽力でハンドボール競技の普及と競技力向上を目的として氷見市ハンドボール協会が創立されたと載っています。

これ以後、国体（S33年、H12年）、インターハイ（S36、S51年、H6年）、全国高校選抜大会（H13～15年）等の全国大会を積極的に誘致し、成功裏に終えたことで名実共に全国に氷見の名を知らしめるとともに、ハンドボールの競技力向上と普及・発展に大きく貢献することとなりました。

また、競技人口の増加と底辺の拡大にも努め、昭和50年代後半には当時の氷見クラブ（氷見高校ハンドボール部OBが中心）のメンバーや先生方のご努力下市内小学校にハンドボールが少しずつ普及し、平成元年度からは上庄や窪、仏生寺の各スポーツ少年団、十三ジュニア、HC宮田等が全国小学生大会（京都京田辺市）で好成績を収め、今日に至っています。

平成17年度から「春の全国中学生ハンドボール選手権大会」が開催（今年で19回。西條中男子が9年ぶり2回目の優勝）されていること、そして最近の10年間では小学生、中学生、高校生がそれぞれのカテゴリーで優勝または準優勝するなど、全国大会で好成績を収めていることもあって「ハンドボールのまち氷見」を全国にアピールし、そのイメージを盤石なものとしています。

近年、少子化が進み、ハンドボールの競技人口が減少していますが、令和3年に協会有志が中心となって「富山ドリームス」を創設してハンドボールと地域・地元企業を結びつけ、令和5年度からは氷見市を拠点として日本リーグに参戦いたしました。スポーツの力で富山を元気にしたいというトップチームが生まれたこと、そして何よりも、昨年、地元出身の安平光佑選手（現在クウェートリーグで活躍中）がハンドボール男子日本代表のエース・司令塔としてオリンピック出場を決め、今年のパリオリンピックでも大活躍するなど、将来への光明も見えてきています。

70周年の節目を好機と捉え、これまで当協会を支えていただきました氷見市を始め、市教育委員会や市スポーツ協会、県協会、そして、今日まで献身的な活動でハンドボールの普及・発展に取り組んで来られた先輩の方々に深く感謝申し上げるとともに、様々な活動を通してハンドボール愛好者を一人でも多く育てていきたいと考えています。皆様の更なるご理解ご協力をお願い申し上げ、ごあいさつといたします。



氷見市長

林 正 之

## お祝いのことば

このたび、氷見市ハンドボール協会が、設立70周年の記念すべき節目の年を迎えられ、ここに設立70周年記念誌を発刊されますことは、誠に意義深いことであり、心からお祝い申し上げます。

そして、70年にもわたる貴協会の情熱と団結力により、ハンドボールの素晴らしさ楽しさを次世代へと伝えておられますことに、敬意を表しますとともに、深く感謝申し上げます。

さて、貴協会は、昭和29年の発足以来、競技力の向上はもとより、ジュニア及び指導者の育成や大会誘致などに積極的に取り組まれております。そのご尽力により氷見市のチームは、数々の全国大会をはじめ各種大会において優秀な成績をおさめ、また、全市あげて大会運営するなど、今では「ハンドボールのまち氷見」として、全国に名を馳せているところであります。

特に、2000年代に入り、地元で開催された「2000年とやま国体」で氷見高校を中心とする成年男子の優勝にはじまり、中学生では全中、春中での氷見勢4度ずつの優勝、そして、平成30年の氷見高校男子ハンドボール部の高校3冠（選抜大会、高校総体、国体）達成は、全国に強烈な印象を与え、ハンドボールと言えば氷見のイメージを更に強く印象づけました。

また、平成17年度から継続開催している「春の全国中学生ハンドボール選手権大会」は、全国の中学生ハンドボーラーの憧れの舞台へと定着していることは、本市にとっても大変喜ばしいことでもあります。

さらには、令和4年に発足した、地元を拠点とする男子ハンドボールチーム「富山ドリームス」が昨年からはトップリーグに参入したことで、より一層ハンドボール熱が高まってきております。

今後も、貴協会の皆様には、これまで培ってこられた人脈、経験を活かし、本市のスポーツ振興、ハンドボール競技の発展に、今後ご支援とご協力を賜りますようお願いいたします。

終わりに、本誌発刊に際し、編纂と執筆に当たられた委員及び関係各位に深甚なる敬意を表するとともに、氷見市ハンドボール協会の今後更なる飛躍を祈念してお祝いのことばといたします。



氷見市議会議長

積 良 岳

## お祝いのことば

氷見市ハンドボール協会が創立70周年を迎え、これまでの足跡を振り返り、更なる飛躍を目指して記念誌を発刊されますことは、誠に意義深いことであり、心からお祝い申し上げます。

また、70年の長きにわたり、貴協会の維持・発展にご尽力されました歴代会長をはじめ、役員や会員の皆様のご努力に深く敬意を表する次第であります。

貴協会が設立されました昭和29年には、当時、全国的にみても極めて異例な一郡一市の大同合併により、現在の氷見市が形成されており、貴協会の歴史はそのまま氷見市の歴史であると言っても過言ではないのです。

協会設立以来、ハンドボール競技の強化、推進にご尽力されたことにより、国体、高校総体、全国中学校ハンドボール大会など数多くの全国大会において好成績をおさめられますとともに、数々の全国大会の誘致にご協力いただいたことで、本市が名実ともに「ハンドボールのまち氷見」として全国的に知られることになったのも、ひとえに貴協会のご努力の賜物と存じます。

今年で19回目を迎えた「春の全国中学生ハンドボール選手権大会」は、春の到来を告げる本市の一大イベントとなっており、この舞台を経験した全国の中学生ハンドボーラーからオリンピック選手が誕生するなど、その功績は大変大きなものがございます。

さらには、本市を拠点に令和4年に発足した「富山ドリームス」が日本ハンドボールリーグで活躍するなど、ハンドボールへ寄せる期待はより一層の高まりを見せております。

貴協会におかれましては、この度の創立70周年を契機として、次なる目標に向けた力強い前進にご期待申し上げますとともに、引き続き、ハンドボールの振興に邁進していただきたいと存じます。

結びに、氷見市ハンドボール協会の限りない発展と、会員の皆さまのご健勝、ご多幸を心からお祈り申し上げます、お祝いのことばといたします。



氷見市教育委員会教育長  
有 島 洋 之

## 氷見市ハンドボール協会創立70周年を祝して

氷見市ハンドボール協会が、創立70周年の記念すべき節目の年を迎えられ、創立70周年記念誌を発刊されますこと、心からお祝い申し上げます。

さて、「ハンドボールのまち氷見」の歴史は、昭和33年の富山国体での氷見高校男子の優勝から始まり、これまで、小学生から高校生、一般まで、あらゆる年代で輝かしい成績を取ってこられました。また、氷見市では、全中、高校総体、2000年とやま国体のハンドボール競技、高校選抜ハンドボール選手権大会（3年間）等が開催されています。そして、平成17年度（18年3月）からは、春中ハンドが開催されており、全国的にも、「ハンドボールのまち氷見」と認知されています。

令和6年1月1日、能登半島地震が発生し、氷見市も甚大な被害を受けました。春中ハンドも、氷見市での開催を断念し、福島県を代替地として第19回大会が行われました。困難な状況の中、西條中学校男子ハンドボール部が全国制覇を成し遂げ、能登半島地震からの復興に向かう氷見市民に大きな元気と勇気を与えてくれました。

また、貴協会では、小・中・高の一貫指導体制にいち早く取り組み、着実に成果を上げるとともに、間近に日本や世界のトッププレーヤーと接する貴重な機会を設けてこられました。そのような環境の中から、五輪2大会連続出場を果たした西山清選手、海外でも活躍し、パリオリンピック出場を果たした安平光佑選手など、日本を代表するアスリートが生まれています。このことは、スポーツを愛する多くの子供たちに大きな夢と希望を与え、さらには、氷見市民の誇りにもなっています。

氷見市では「第2期氷見市スポーツ推進計画」を策定し、目指す姿を「スポーツで拓く明るい未来～元気なひみ スポーツの力で～」としています。スポーツを通じて交流人口の拡大や地域の活性化を図るとともに、高い水準の競技スポーツに間近で触れることを通して、子供たちのスポーツに対する意欲、競技力を高め、次世代を担うアスリートの育成にもつなげていきたいと考えております。貴協会におかれましては、これからも、その推進役を果たしていただきますようお願い申し上げます。

結びに、本記念誌の発刊にご尽力された関係各位に深甚なる敬意を表するとともに、氷見市ハンドボール協会の更なる飛躍と、会員各位のご健勝を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。



公益財団法人氷見市スポーツ協会長

藪田 栄治

## 創立70周年に寄せて

この度、氷見市ハンドボール協会が創立70周年をお迎えになりましたことを心よりお祝い申し上げます。

昭和29年の創立以来「ハンドボール競技の普及・振興と氷見市内のハンドボールチームの育成強化を図りスポーツ文化の進展に寄与する」ことを目標に歴代の会長様はじめ役員の皆様、そして多くの会員の皆様がそれぞれにご努力を繋ぎながら大きな成果を積み重ねてこられましたことに深い敬意と感謝を申し上げるものであります。

氷見と言えば「鰯」あるいは「鰯」という言葉がまず頭に浮かぶのではないかと思います。同等以上に「ハンドボール」も氷見のイメージを表す言葉として全国的な知名度を得ているのではないのでしょうか。氷見高校や有磯高校の歴代ハンドボール部が強豪校として全国にその名をとどろかせ、また今年度（2025年3月開催予定）で20回を迎える「全国春の中学生ハンドボール選手権大会」は「春中ハンド」の名で全国に知れ渡り、氷見が「ハンドボールの聖地」と言われるまでになりました。これほどまでに氷見市を全国的に押し上げてきた「ハンドボール」というスポーツ、この競技を市内外問わず長年にわたって支えてこられた屋台骨が「氷見市ハンドボール協会」という組織であり、役員・会員の皆様であります。

御協会は70年という長き歴史の中で、小中高校生の児童生徒に対する指導や各種大会の開催などをおしてスポーツの振興に寄与し、最近では「富山ドリームス」の活動に代表される地域振興にも少なからず関与するなど、一競技の普及振興のためだけではなく、スポーツをとおした「まちづくり」に取り組む組織として大きな社会的役割を担ってこられました。

70周年という節目のこの年は、奇しくも能登半島地震が氷見に大きな打撃を与えた年であり、またそこから市民一丸となって立ち上がる「復興元年」と位置づけられた年であります。会員の皆様の中にも大きなダメージを受けられた方もおいでのことと存じますが、これを契機に氷見市ハンドボール協会の皆様がますますその絆を強められ、震災復興のシンボルとしても御協会が更なるご発展を果たされますことをご祈念申し上げ、お祝いの御挨拶といたします。



富山県ハンドボール協会会長  
城川 俊久

## 創立70周年を祝して

氷見市ハンドボール協会の創立70周年を迎えるにあたり、富山県ハンドボール協会を代表として、心からお祝いを申し上げます。

氷見市におけるハンドボールの振興につきましては、小学生から社会人までそれぞれのカテゴリーにおいて、普及・強化に尽力されていることに深く感謝申し上げます。

小学生につきましては、毎年8月に開催される全国小学生ハンドボール選手権において、19回から22回の4年間、女子の部で上庄ハンドボールクラブ・窪スポーツ少年団・仏生寺スポーツ少年団の2連覇や2017年の30回大会に女子の部において十三ジュニアの優勝など、輝かしい成績を収められました。

また、貴協会は、この20年間において、氷見市役所協力のもと中学生の第1回春の全国中学生ハンドボール選手権を2006年3月25日から10年間開催する予定でありましたが、日本ハンドボール協会からの要望で、来年の2025年の20回大会まで開催をする予定となっています。

この大会では、男子において氷見市立北部中学校の優勝や、今年は能登半島地震により、甚大な被害があり、氷見市の開催を断念しましたが、福島県協会の協力のもと福島県開催となり、氷見市立西條中学校が出場し2度目の優勝を果たしたところでもあります。

高校においては、氷見高等学校が、3月の全国選抜大会、8月の全国高校総体、9月の国体の全国大会3冠を達成されました。

社会人においては、氷見市を拠点とした富山ドリームスが昨年から日本リーグに参戦しております。

このように小学生から社会人までのすべてのカテゴリーで頑張っている中で、1984年ロサンゼルスオリンピックの代表選手として氷見高等学校出身の西山清さん以来、今年度開催のパリオリンピックに代表選手として氷見高等学校出身の安平光佑選手が選ばれており、活躍を期待しているところでもあります。

今年8月には、全国中学校大会が氷見市を会場に開催されることとなっております。

この様に貴協会は、大会運営はもとより、選手強化に尽力されておりますが、今現在少子化によるチーム数の減少や、先生の働き方改革による中学校のクラブ化など、いろいろな諸問題が山積みではありますが、これからもハンドボールの聖地にふさわしい活躍をされますことを祈念し、あいさつにかえさせていただきます。

# CONTENTS

ごあいさつ	氷見市ハンドボール協会 会長 谷内口数尚	
お祝いのことば	氷見市長 林 正之	
お祝いのことば	氷見市議会議長 積良 岳	
氷見市ハンドボール協会創立70周年を祝して	氷見市教育委員会教育長 有島 洋之	
創立70周年に寄せて	公益財団法人氷見市スポーツ協会会長 藪田 栄治	
創立70周年を祝して	富山県ハンドボール協会 会長 城川 俊久	
<b>氷見市ハンドボール協会の歩み51年～70年（2004年～2023年）</b>		<b>1</b>
2005 (H17) 第1回春の全国中学生ハンドボール選手権大会に参加して	稲積 翔平	3
2006 (H18) 全国小学生大会県勢女子初優勝を経験して	竹内 貞明	4
2007 (H19) 大好きなハンドボール	新井 龍雄	6
2008 (H20) 第21回全国小学生ハンドボール大会優勝を振り返って	西 裕之	7
2009 (H21) 第22回全国小学生ハンドボール大会優勝を振り返って	西 裕之	8
2010 (H22) 初めて立った全国中学校ハンドボール大会の舞台	中山 和美	9
2011 (H23) 夏の全国大会の思い出～中学校～	安平 拓馬	10
2012 (H24) 第25回全国小学生ハンドボール大会の思い出	国田 潔	11
2013 (H25) 全国高校選抜大会「春は愛知で」	中山 光広	12
2014 (H26) 第10回春の全国中学生ハンドボール選手権大会について	酒井 政勝	13
2015 (H27) 創部30周年での全国大会出場	西田 豊	14
2016 (H28) 夏の思い出	朝野 暉英	16

2017 (H29)	全国制覇	堀 緋奈乃	17
	選抜大会を終えて	椎木 尚祐	18
2018 (H30)	三重インターハイの挑戦	徳前 紀和	19
	自分たちとの戦い、自分たちの取り組みへの自信へのchallenge！三冠へ	徳前 紀和	21
2019 (H31・R1)	忘れられない夏の全国大会と仲間たち	畑中 大靖	23
2020 (R2)	第16回春中ハンド優勝	中川 英明	24
2021 (R3)	全国大会で銀メダルとともに得たもの	井上 拓己	25
2022 (R4)	春中ハンドに出場して	林 伸恭	27
2023 (R5)	走りぬいた夏	小坪 夏星	29
	インターハイに出場して	本川 拓斗	30
2024 (R6)	春・夏の全国大会に出場して	井上 拓己	31
特別寄稿	パリ五輪アジア予選を終えて	安平 光佑	32
	史上初！アジア競技大会 金メダル	北原 佑美	33
	チャレンジあるのみ！	指崎 泰利	34
	志士奮迅	森 康陽	35
参考資料	氷見市ハンドボール協会 役員		36
	成績年表		37
編集後記			43

# 氷見市ハンドボール協会の歩み

## 51年(2004年 H16年)～70年(2023年 R5年)

氷見市ハンドボール協会の51年目からの20年を振り返ってみると、小学生、中学生、高校生の各カテゴリーで全国優勝を始めとした上位入賞を果たすなど、大きな活躍がみられた20年であったと思われる。

### <小中学生女子>

その活躍について、まず小中学生女子の部を振り返ってみると、2006年度に上庄スポーツ少年団が念願の全国優勝を果たし、翌年の2007年度には窪スポーツ少年団女子が氷見勢として連続優勝、さらに2008年度、2009年度と仏生寺スポーツ少年団が優勝と氷見市の小学生が4年連続全国優勝を達成した。

さらに、仏生寺は十三Jrとチームを変更してからも2017年に優勝し、この20年間で氷見勢として5度目の優勝を果たした。

※小学生女子成績

#### ○全小優勝5回

2006年上庄、2007年窪、2008年仏生寺、  
2009年仏生寺、2017年十三Jr

#### ○準優勝2回

2010年仏生寺、2014年比美乃江、

#### ○3位3回

2011年上庄、2015年宮田、2019年比美乃江

小学生で活躍した選手が、中学校女子においても躍動し、2007年度第3回春中ハンドにおいて北部中学校が春中ハンドにおいて県勢初の3位入賞を達成してからは、毎年のように北部中、西條中、十三中が全国大会の上位まで進出した。

小学生カテゴリーの指導者が、丁寧な指導を心がけ、ハンドボール競技に携わる子どもたちを多く引きつけ、かつ強化に熱心に取り組んできた成果が、中学校の部においても継続され、全国大会での上位入賞につながってきた。

※中学女子成績

#### ○全中準優勝1回

2010年西條

#### ○全中3位4回

2009年北部、2021年十三、2022年十三、  
2023年北部

#### ○春中準優勝5回

2008年度北部、2011年度十三、  
2014年度西條、2016年度北部、  
2021年度十三

#### ○春中3位5回

2007年度北部、2015年度十三、  
2018年度十三、2020年度西條、十三

### <小中学生男子>

小学生男子においては、この20年間で優勝こそ無かったが、準優勝5回、3位入賞が2回と常に上位を争ってきた。

※小学生男子成績

#### ○全小準優勝5回

2008年窪、2012年窪、2019年窪、  
2021年宮田、2023年宮田

#### ○3位2回

2009年上庄、2015年上庄

男子においても小学生が安定してチーム力を維持し、その経験者が中学校に入学しても競技を続けていることから、中学校において常に全国トップレベルの戦いを繰り広げてきた。また、小学校の経験者が多く在籍してきた西條中や北部中だけでなく、未経験者が多い中で南部中学校も質の高い指導と豊富な練習量で、西條中や北部中と匹敵する力をみせ、3校ともに全国上位入賞を達成してきた。

特に、2014年度第10回春中では、西條中と北部中が決勝で対戦し、西條中が県勢初となる優勝を果たした。この優勝チームの主力は、2012年度の全小準優時のメンバーであり、2015年度全中でも

優勝と2冠達成、高校進学後も氷見高校で主力となり、高校選抜、インターハイ、国体と三冠を達成した。

さらに2016年度には、北部中が全中で優勝し、県勢として2年連続（通算4度目）の優勝を果たした。

また2020年度春中において北部中が優勝、2023年度春中で2021年全小準優勝の宮田スポ小のメンバーが主力の西條中が優勝と、この20年間で全中2回、春中3回の優勝を達成した。とりわけ2023年度第19回春中は、元日の能登半島地震の影響により、急遽福島県での開催となったが、西條中が見事に優勝を果たし、被災地に大きな勇気と感動を与えてくれた。

※中学男子成績

#### ○全中優勝2回

2015年西條、2016年北部

#### ○全中準優勝3回

2006年北部、2013年西條、2021年北部

#### ○全中3位2回

2011年西條、2019年北部

#### ○春中優勝3回

2014年度西條、2020年度北部、2023年度西條

#### ○春中準優勝2回

2013年度西條2014年度北部

#### ○春中3位6回

2007年度南部、2011年度南部2012年度西

2016年度北部、2017年度北部、2018年度北部

### <高校男女>

高校においては、2013年度高校選抜大会において氷見高校女子が3位に入賞した。また、男子においては、前述した2015年全中優勝した西條中出身者を主力としたチームが、2016年度選抜3位、2017年度インターハイ準優勝、選抜優勝、2018年度インターハイ優勝、国体優勝と高校三冠を達成した。2023年インターハイにおいても3位に入賞している。

高校三冠を達成した主力の安平光佑選手は、ヨーロッパリーグや日本代表としても活躍し、

2024パリオリンピック代表選手として選出されている。

このような20年間の活躍があった要因として、まず2000年国体に向けて小中高の連携した普及強化策があり、その強化を継続して行ってきたことが考えられる。また、国体に続いて2001年から3年間行われた全国高校選抜大会、2005年からは春の全国中学生ハンドボール選手権大会が現在まで継続して開催され、全国大会という舞台が市民にとって身近な存在となり、「全国大会で活躍したい」「春中ハンドに出場したい」と願う志の高い小学生ハンドボーラーが増加したことも一因であると思われる。

さらには、平成6年インターハイや2000年国体で活躍した選手が、指導者となって小中学生を指導するという好循環があり、市協会にとっても大きな飛躍がみられた20年間であったと思われる。今後は、少子化の影響により、これまでのチーム編成が困難な状況となってきた。中学校部活動の地域移行の課題もあるため、チームの再編等を市協会全体で考え、氷見市においてハンドボールが存続していく環境を整備していくことが必要であると思われる。

## 第1回春の全国中学生ハンドボール選手権大会に参加して

稲積 翔平

「氷見で全国大会が始まる！」そのニュースに私は喜びでいっぱいでした。中学生には夏の全中しか全国大会がなく、チームメイトと年に1回しかない全国大会の優勝を目標に練習を続ける日々でした。しかし、「私たちの年代から3月にも全国大会を実施する」という事実が練習のやる気や日本一になる気持ちをより高めてくれました。また、その開催場所が地元氷見であることが、より第1回目の全国大会の実感を与えてくれました。テレビ放送に氷見市のハンドボールの特集が流れたり、氷見市ハンドボール協会の方々や氷見市長をはじめとする氷見市の方々が全国大会の準備をしてくださっていたり、近所の人たちから「全国大会頑張っ！」と声をかけてもらえたり、中学生ながら肌で感じて分かるほどの盛り上がりでした。11月の出場校を決める予選会で優勝することができ、第1回の上場権を手にしてからは、その盛り上がりもより一層増し、大会当日が待ち遠しかったです。

大会当日には、日本中の各都道府県代表の中学生が集まりました。関係者の方々が全国大会の上場を称え、第1回目の春中の開催を盛り上げようと、「寒ブリっこ」という地元中学生のメンバーで開会セレモニーを盛り上げたり、元日本代表の宮崎大輔さんをはじめとする多くの日本を代表する選手の方々と一緒にセレモニー試合をしたりして、開会式は大いに盛り上がりました。

試合が始まると多くの氷見市民が試合会場に足を運んでいました。氷見市内の地域ごとに各都道府県を応援する地元サポーターがおり、どのチームの試合も常に大声援が飛び交う、中学生に春中を楽しんでもらえる明るい雰囲気がありました。

私は抽選の結果、2回戦からの上場になりました。初戦は大阪府代表との試合でした。ワクワクしていた気持ちも緊張に変わり、堅さのある前半になりました。フットワークを駆使したカバー

リングのディフェンスがうまく相手のミスを誘うことができ、失点は抑えることができたものの、シュートミスなど基礎的なミスでなかなか得点を重ねることができない展開になってしまいました。保護者や友人、地元のハンドボール関係者の声援の後押しもあり、なんとか初戦を勝ち上がることができました。試合後には多くの関係者の方々に「良かったぞ。次もがんばれ!」「このまま優勝だ」と声をかけてもらい、多くの人に支えてもらっている安心感をえました。3回戦目はその気持ちを大事に安定した試合運びをすることができました。準々決勝では秋田県代表との試合でした。大会3日目からは1日2試合のため、試合開始は17時10分からと辺りは暗くなっているにも関わらず、ふれあいスポーツセンターは満席で大応援の中で試合をしました。試合は一進一退の展開になりラスト1分で失点してしまい、1点差で負けてしまいました。会場から「頑張った。」「泣くな!」という温かい声援があったことを生涯忘れないと思います。

春の全国大会、春中も東日本大震災や新型コロナウイルス感染症拡大、能登半島地震などを乗り越え、今年度で20回目を迎えます。地元応援団があったり、氷見の海産物の仕出しがあったり、負けチームの交流戦会場があったり、「ハンドボールの聖地・氷見」らしい大会運営に多くのハンドボーラーが世界へ羽ばたく登竜門として、中学生の目標になっている大会の第1回目の上場者となったことを心から嬉しく思います。第1回目の貴重な経験は今の自分を作っています。春の全国中学生ハンドボール選手権を作ってくださった氷見市ハンドボール協会をはじめとする多くの関係者の方々に感謝しています。

## 全国小学生大会県勢女子初優勝を経験して

竹内 貞明

私が上庄ハンドボールクラブの監督に就任した当初、男子は窪スポ少、女子は仏生寺スポ少が県内でも群を抜き、両チーム共に全国大会の常連チームであった。

男子の窪スポ少は過去に優勝経験があったものの、県勢女子としては仏生寺スポ少が7回、窪スポ少が3回の準優勝経験はあったが、あと一步のところで多くの悔し涙を流してきたことに対して、優勝することの難しさと決勝戦には目に見えない「高い壁」があると感じていた。

平成28年（2006年）7月28日から、京都府京田辺市（田辺中央体育館他）で開催された第19回全国小学生ハンドボール大会に出場することとなった上庄ハンドボールクラブは、攻めのエースCP森優稀と守りの要GK山田美希を主軸とした、攻守とも非常にバランスの取れたチームであり、全国大

会でも上位入賞が期待できるチームだった。

準決勝まではチーム状態も良く、どの試合も危なげなく勝ち上がることができた。ただ、決勝戦ではこれまで軽快に動いていた身体も真夏の短期決戦であるがゆえの疲労感と独特な雰囲気からくる緊張感が目に見える形で出ていた。上庄本来の動きでないことが試合前半から確認でき、これが正しく「高い壁」なのか！と幾度となく感じる時間帯があった。

相手のゆっくりとした攻めのペースにもままとはまり、ロースコアのまま前半を4-4、後半は3-3の同点で延長戦に突入。延長戦は、上庄CP田嶋姉妹のサイドシュートが決まるものの、相手エースのミドルシュートを防ぐことができず、前半は2-2、後半1-1、合計得点10-10で7mスローコンテスト（7mtc）にもつれ込むこと



となった。

ただ、その時点で私が密かに勝利を確信できたのが選手の表情であり、言動だった。

日頃からプレッシャーを与えながら7m t cをしっかりと練習して大会に臨んだこともあり、選手自ら投げる順番も決め、相当の緊張感の中でも声を掛け合い、励まし合いながらコートに向かっていった後ろ姿を見たからである。

大会に臨むための準備はやはり大切なものであり、結果、GK山田が相手シュートを2本連続で止め、CP森優稀と森彩華が冷静にシュートを連続で決めたことで富山県勢女子として初の全国制覇を成し遂げることができた。

この結果は決して上庄ハンドボールクラブだけで成し得たものではなく、氷見市協会をはじめ、上庄児童クラブハンドボール部の立ち上げから指導にご尽力いただいた先生方、地域の皆様、数々の歴史を築いてくれたOB、OG、そして全面的に協力していただいた保護者のお陰だと心から感謝いたしております。

時代の流れや少子化の影響もあり、今は上庄ハンドボールクラブとして大会に臨むことはできなくなりましたが、有志や保護者が上庄小学校でハンドボール教室を楽しく開催してくれています。今は、このような活動こそがスポーツの原点であると感じています。

・決勝戦 上庄ハンドボールクラブ 12-10 玉名町小学校（熊本県）



## 大好きなハンドボール

新井 龍雄

窪女子にとっては、19年ぶりの全国大会出場となりました。予選リーグを順調に勝ち進み、準々決勝は同じ北信越のライバルチームである木田（福井）との対戦に決まりました。前半は同点、後半も8対8の同点で進む中、残り4分で2分間の退場者が3人というピンチに見舞われました。しかし、檜木のドリブルからの9点目、ゴールキーパーの好セーブ、そして上野のダメ押しとなる10点目で、逆にリードを広げました。試合終了のブザーが鳴り響くと、全員が飛び上がって喜び合い、厳しい試合を勝ち抜いた喜びを分かち合いました。準決勝では桃園小（京都）と対戦し、前半を6点差で折り返しましたが、後半はリズムを崩し、やや不安を感じさせる展開となりました。しかし最終的には17対14で勝利を収めました。決勝戦では水海道HC（茨城）と対戦。子供たちは落ち着いて試合に臨みました。ミーティングでは、170cmの大型ポストにディフェンスを集中させることを指示し、相手のペースに飲み込まれないよう

に心掛けました。強力なセンターとサイドシュートを狙い、檜木と北山の5年生コンビが得点を重ねました。ディフェンスからのインターセプトによる速攻も功を奏し、前半を7対3、後半も8対5と、試合を終始優位に進めることができました。全国大会出場に際して、6年生には「後悔しないように」、5年生には「自分の持てる全てを出してみよう」と問いかけましたが、選手たちは試合を通じて最高の答えを示してくれました。全国大会という大舞台で、大好きなハンドボールに打ち込み、仲間と力を合わせる素晴らしさを実感してくれたように思います。最後に、氷見市や富山県のジュニア指導者の皆様、また氷見市や協会関係者の皆様のご支援に深く感謝申し上げます。氷見のハンドボールが2年連続で全国大会優勝という結果を残せたことで、私たちジュニア指導者の活動が改めて報われたように感じています。これからも、子供たち一人一人に合ったアドバイスを考え、実行し、共に歩んでいきたいと思っています。



## 第21回全国小学生ハンドボール大会優勝を振り返って

西 裕之

「田辺中央体育館の決勝の舞台に立たせてやりたい。そして今度こそ、金メダルを勝ち取りたい」その思いだけでこの大会を戦ったことを覚えています。

これまで、仏生寺スポーツ少年団は何度も全国大会に出場し、準優勝が6回。ある雑誌には「銀メダルコレクター」と書かれていました。私自身も2度の準優勝を経験し、悔しい思いを抱いていました。

予選の2試合目。関東大会で優勝している三郷ハンドボールクラブとの対戦。私は、試合前からこの試合の重要性を感じていました。県内ではあまり経験したことのないダブルポストで攻めてくるチームだったため、徹底的に対策を考え練習をしました。試合は一進一退の攻防でしたが、ディフェンスが機能し、2点差で勝利することができました。今思えば、この試合の勝利で勢いづき、選手も自分も「接戦でも絶対勝ち切れる」という自信がもてたのだと思います。

決勝トーナメントに入ってから、接戦の連続でした。準々決勝では大分県代表の明野西ハンドボールクラブとの対戦。終盤でエースの1人が退場した時には、負けを覚悟しましたが、逃げ切って3点差の勝利。準決勝では熊本県代表の当尾小学校との対戦。試合序盤で5点差をつけられ苦しい展開でしたが、ここから主将の檜木（現アランマーレ主将）が5連続得点を決めて追いつき、最終的には3点差で勝利しました。

決勝は、愛知県代表の平針南小学校との対戦。これまで何度も打ちのめされてきた決勝の壁。「この壁を選手とともに越えたい」という一心で戦いました。田辺中央体育館のコートに響く父母会の熱い応援が選手の大きな力になりました。そして、6点差の勝利。優勝の瞬間、選手の中から涙が溢れ、肩を震わせてい

る姿を見て、選手一人一人の頭を撫でてやったことを覚えています。長年コーチとして歩んでこられた林外美さんと握手したのも、この時が初めてだったように思います。林さんがこの優勝を誰よりも待ち望んでいたことは言うまでもありません。

この年、仏生寺小学校の全校児童は40人。そのうち17人の女子ハンドボール部員が成し遂げた功績は、今も私の誇りです。



## 第22回全国小学生ハンドボール大会優勝を振り返って

西 裕之

前年度、全国大会初優勝を成し遂げ、2連覇に挑んだこの年の全国大会。選手の半分以上は昨年の優勝を経験していました。

予選から点差が開く試合が多く、結果だけを見れば圧勝ですが、簡単なミスが目立ち、集中力を欠いた試合になりました。

決勝トーナメントに入り、準々決勝は北海道代表の高盛ハンドボールクラブとの対戦。動きの速いチームで、そのことがかえって選手の普段の動きを取り戻すことにつながりました。10点差で勝利を収めましたが、それ以上に価値のある試合になったと思います。

準決勝は地元京都の桃園小学校との対戦。前日に動きを取り戻したこともあり、この試合も10点差で勝利を収めました。そして決勝は沖縄県代表の宮城小学校です。これまで仏生寺スポーツ少年団は、幾度も沖縄県代表のチームと戦い、苦杯をなめてきました。沖縄県のチームは、身体能力の高い選手が多く、個の力で試合を進めてきます。仏生寺のよさは組織力です。選手は、同じ学校の同じ教室で過ごし、放課後は共に汗を流すという生活を毎日繰り返し、1日10時間以上同じ環境で生活しているのです。私自身も6年生担任であり、日常で築き上げられた「信頼関係」が最大の強み

です。互いの考えを知り、言いたいことも言い合える関係があれば、チームワークは強まり、必ず個の力に勝てると信じて試合に臨みました。試合は序盤からペースをにぎり、前半は9点差リード。後半もリードを保ち、8点差で勝利しました。2連覇が現実になった瞬間でした。そして、予選から決勝までスターティングメンバー全員が得点したということが、このチームの総合力を証明していると思います。チームスポーツにおいて「私が決める」という個の強い気持ちはもちろん大切ですが、「次は〇〇に決めさせる」という仲間のことを考える気持ちは、広い視野をもつプレーにつながります。そして、何よりもチーム全体の雰囲気よくなり、試合によりリズムが生まれることを、この年の選手から学びました。

この年の全校児童は30人。仏生寺スポーツ少年団は翌年、学校の閉校とともに、長く続いた歴史に幕を下ろしました。3連覇をかけて臨んだ最後の年は惜しくも準優勝でしたが、それでも立派な結果でした。現在も仏生寺スポーツ少年団の歩みは、十三ジュニアハンドボールクラブに受け継がれています。



## 初めて立った全国中学校ハンドボール大会の舞台

中山 和美

あれから約14年が経つ。

ハンドボールを始めたのは小学4年生の頃だった。昔から運動が大好きで、家族全員ハンドボール経験者。ハンドボールをしないという選択肢が見つからなく入ったクラブチーム。いろんな仲間との出会い、切磋琢磨をし、一生懸命ボールを追いかけたのが懐かしい日々だ。

小学校に入る前、私は足の股関節の骨が溶けてしまう病気『ペルテス病』にかかり、入院と二度の手術、約4年間のリハビリを経てようやく走れるようになったのだ。

ハンドボールをしているときのシュートを打つ感覚、仲間との勝利の喜び、敗北の悔しさ、これが私にとって初めての感覚で、たちまちハンドボールの虜になった。すべてが新鮮で、6年生になった頃の全国大会では、あれよあれよという間に優勝。そこから、『目の前の今を全力で前進すること』が私のハンドボールに対する姿勢になっていった。

そして、最高の戦友に出会い、中学に上がった。今までの練習とは訳が違い、かなりハードで、それもまた私の中ではとてつもなく快感で、外での走り込み、死にものぐるいで打ったシュートノック、灼熱の太陽の下真っ黒に日焼けしながら互いを追い込んだ夏休み、そして、中学3年になった、あの夏の大会。

点を重ねられたって、どんなに追い込まれたって、チーム全員で燃えるように楽しみながら戦った。とてつもない力を感じ、あの時、今までの蓄積、経験、葛藤、すべてが1つになった感覚を今でも鮮明に覚えている。だからこそお互いに声をかけあい、背中を叩き、体でぶつかるあのときの風、音、言葉、瞬間。それは、わたしにとって忘れることのできないものになったのだ。惜しくも結果は、2位だったが、あの大会は、紛れもなく私の中では、全てを含めて優勝よりも大きなものを得られたと思う。

ともに戦ってくれた戦友、全力で私達を信じてくれた恩師、辛いとき苦しいときいつも背中を押してくれた家族、見えないところでサポートしてくれた皆様。ここから今でも感謝している。

今でもどこかで熱い思いでハンドボールに取り組む戦士の皆様を、次は、私が心から応援し、エールを送り続けていきたいと思う。

## 夏の全国大会の思い出～中学校～

安平 拓馬

春に富山県で開催される「春の全国中学生ハンドボール大会」を、私は観戦のために毎年訪れていました。全国の高レベルなプレーヤーたちの技術や会場の雰囲気を感じ、その大会に憧れ、自分もいつか出場したいと強く思っていました。しかし、私の代で出場を目指していた春の全国大会は震災の影響で中止となり、憧れであった全国大会への出場は夏の大会へと持ち越されました。

中学生の頃、私は自分が不器用であることを自覚していたため、トップ選手になるために毎日途方もない量の練習をしていました。朝は登校前にランニングを行い、部活動が終わった後はさらに3時間の自主練習を続けるのが日課でした。今振り返ると信じられないほどの練習量で、当時の自分を褒めてあげたいと思います。もちろん、私一人では続けられなかったでしょう。友人、指導者、ライバル、環境、そして親の支えがあったからこそ、頑張り続けることができました。

そして迎えた全国大会。私たちの代では初めての全国大会であり、非常に緊張しました。どれだけ練習しても不安な気持ちは拭えず、負ければ中学生としてのハンドボール生活が終わるというプレッシャーもありました。しかし、会場に足を踏み入れると、賑わいと多くのすごい選手たちに刺激され、負けることの不安よりも戦ってみたいというワクワク感が強くなりました。試合ごとにチームで勝利を喜び、チームの絆が深まっていくのを実感しました。

ベスト4進出をかけた試合では、当時無敗の優勝候補と噂されていた松橋中学校と対戦しました。試合前のアップから相手チームの威圧感があり、逆立ちをしている姿にも驚きました。試合は接戦となり、会場全体がヒートアップしてくのを肌で感じました。「一点も決めさせない」「少しでも多くゴールを狙う」という気迫は、相手チームにも伝わっていたと思います。残り時間が少なくなると、通常は焦りにより消極的になりがちな場面ですが、誰にも負けない練習量をこなしてきたという自信が心の支えとなり、落ち着いてプレーをする事ができ、勝利を掴むことができました。初めて「練習してきてよかった」と心から思えた瞬間でした。

準決勝では、手代木中学校と対戦しました。スピード感とフィジカルを兼ね備えた両利きの選手に終始翻弄され、惜しくも敗北しました。優勝を目指していただけに悔しい気持ちが残りましたが、もっと練習が必要だと感じ、高校でのリベンジを誓いました。

これから全国大会に出場する選手たちには、頑張っただけで欲しいと思います。戻ることでできない時間だからこそ、悔いのない思い出になるよう、質の高い練習をして欲しいです。私もまだやれることがたくさんあるので、これからも頑張っていこうと思います。

## 第25回全国小学生ハンドボール大会の思い出

国田 潔

この年のチームは、6年生の安平光佑君と清水裕翔君を中心とした5人のメンバーに、5年生2人を加えたチーム構成で全国大会に臨みました。当時の5年生は得点力が低く、チームの主力は6年生でした。

予選リーグを順調に勝ち進みましたが、決勝トーナメント1回戦で対戦した熊本県の玉名小学校は強敵でした。前半で5点差をつけられ、劣勢に立たされました。

しかし、後半には持ち前の攻撃力を発揮し、一時は1点差で勝ち越すことに成功しましたが、すぐに同点に追いつかれました。その後、作戦タイムを取りましたが、残り時間はわずか8秒でした。残り時間は少なかったのですが、私はこのチームの攻撃力ならば必ず勝てると信じていました。そんな中、安平君が「スカイプレーしてもいいですか?」と聞いてきました。彼の提案を受け入れたところ、残り1秒で見事に得点を決め、劇的な勝利を収めました。

その後も順調に勝ち進みましたが、決勝で大分県の下郡スポーツ少年団と対戦し、12対11の1点差で惜しくも敗れ、非常に悔しい思いをしました。しかし、この悔しさが彼らの成長を促しました。彼らは西條中学校で春中、全中と優勝を果たし、氷見高校では選抜、インターハイ、国体の3冠を達成するという素晴らしい活躍を見せてくれました。

最近の安平君の活躍は目覚ましく、彼のおかげでオリンピック出場が決まったと言っても過言ではありません。彼の成長を非常に嬉しく思います。

今後も、氷見市のハンドボールの発展のため、第2の安平君のような選手を育てていきたいと考えています。



## 全国高校選抜大会 「春は愛知で」

中山 光広

日本が1972年ミュンヘンオリンピックに初出場したことをきっかけに、「夏のインターハイ以外にも高校生の目標となる全国大会を」という機運が高まりました。そして1978年3月、愛知県に男女20チームが集い、第1回全国高校選抜大会が開催されました。「春は愛知で」が久しく続きましたが、第22回大会から全国各地で開催され、出場チーム数も男女合わせて80チームを超えたことから、インターハイ、国体と並び、高校生ハンドボーラーの目指す3冠の一大会となりました。氷見高校女子チームが第3位となった第37回大会は、「愛知で集結、努力と絆」のスローガンのもと15年ぶりの愛知県開催でした。



1回戦の相手は、全国高校選抜優勝3回の実績がある宣真(大阪)でした。シュート力のあるチームで、大変厳しい試合だったものの、GKを中心に相手の攻撃をよくしのぎ、2点

差で勝利しました。2回戦の北海道函館工業戦は順当に勝ち上がり、3回戦の高水(山口)には常にリードを許す苦しい展開でしたが、残り3分で逆転しベスト8に駒を進めました。準々決勝は、地元愛知の大同大学大同でした。初のベスト4をかけた戦いは、前半からハードプレイの連続で延長戦でも決着がつかず7mTCに突入。12投目で勝利の女神は氷見に微笑み、ゲーム終了の挨拶では、笑顔や涙でお互いの健闘を称え合いました。準決勝は、2年連続優勝を狙う佼成学園女子(東京)でした。前半は、攻守ともに動きが硬く、相手の堅いDFを崩すことができず前半は17対5で大きくリードされる展開。後半は、序盤に連続得点を奪った後は氷見らしい「DFからの速攻」が決まり始め、攻守のリズムを取り戻



しましたが、前半に開いた点差が重くのしかかり、9点差で敗退しました。

連戦の疲れもあり、準決勝で大敗したものの、初の全国選抜大会3位という成果を上げたことはチームにとって大きな自信となりました。これま



での成長を支えてくださった多くの関係者の方々や、会場に足を運んでいただいた皆様に心から感謝いたします。本当にありがとうございました。準々決勝7mTCで

決着がついた瞬間、会場に大きな拍手と歓声沸き上がった光景は今でも色褪せぬ全国高校選抜の1ページとして胸に刻まれています。

あの感激から10年余りの時が過ぎました。その間、コロナ禍で全国大会が開催できない年もありましたが、全国各地で3月「全国高校選抜」の熱いドラマが繰り広げられており、今年も第47回大会が開催予定です。高校生ハンドボーラーとしては全国選抜に向けて日々トレーニングに励んでいる時期です。氷見高校女子も昨年の全国選抜ベスト8を上回る活躍を期待し、氷見の新たな歴史を飾ることができることを願い、エールを送りたいと思います。



## 第10回春の全国中学生ハンドボール選手権大会について

酒井 政勝

昨年は準優勝に終わり、今年こそ悲願の富山県勢初優勝！！と、期待が高まっていました。

チームでは、安平と窪田が昨年からレギュラーとして活躍し、清水は右肘の怪我で出遅れましたが、逆手でのトレーニングを経てパワーアップし、攻撃の中心となるバックプレーヤー陣の一角を担っていました。経験豊富なバックプレーヤー陣に加え、ポストの杉本はワンハンドキャッチが得意で、両サイドの砂山と林は高確率でシュートを決めるサイドプレーヤーです。また、ゴールキーパーの田上は、顔でシュートを止めるほどの気持ち強さを持ち、チームに安心感をもたらしていました。チームは多くの遠征を重ね、大会前にはどこのチームにも負けない自信があるチームに成長していました。

1回戦の相手は、関東で最も強いと前評判の高い茨城県の「手代木中学校」でした。

私がハンドボールの指導を始めた2011年、初めて夏の全国大会である全中に出場し、準決勝で大敗を喫した相手も「手代木中学校」でした。当時は指導者としての駆け出しで、指導力が足りず、前半で大差をつけられ、ハーフタイムに選手たちの前で自分の未熟さに涙を流したことを思い出します。

それから4年以上が経ち、試行錯誤を繰り返しながら成功体験を積み、自分自身も成長してきました。そして、チームの規律を形成し、多くの遠征をこなし、戦術の共通理解を深めるなど、最高の準備をしてこの大会に臨みました。

1回戦当日、ふれあいスポーツセンターのサブアリーナは、注目のカードということで超満員。

西條中を含む地元の応援団、相手チームの応援団、他のチームの観客で埋め尽くされました。

選手たちは序盤こそ緊張から思うようにプレーできない時間が続きましたが、一進一退の攻防の中、前半10分過ぎから徐々に得点を重ね、差を広げていきました。結果、前半16-8、後半23-15で、最終スコアは39-23。今大会の正念場だった初戦を見事に制することができました。

その後も2回戦、3回戦、準々決勝、準決勝と順調に勝ち上がり、いよいよ決勝戦を迎えました。決勝の相手は、氷見北部中学校。何度も練習試合を重ねてきたライバルであり、相手にとって不足はありません。地元同士の対決となった決勝戦は、これまでに見たことのない大応援団と多くの観客が集まり、最高の雰囲気の中で試合が行われました。そして、西條中は33-24で氷見北部中に勝利し、念願の優勝を果たしました。

清水のスカイプレーや安平のバックパスなど、観客を魅了する「魅せるハンドボール」は、今でも多くの方々の記憶に焼き付いていることでしょう。

子どもたちの可能性は無限大です。性格やスキルの違いがあっても、それぞれの個性を活かし、適材適所を見極めることが大切だと感じています。ハンドボールの楽しさだけでなく、仲間と過ごす時間の素晴らしさも伝えるため、これからもハンドボールのコーチを続けていきたいと思えます。

今後も、地元の皆さんの支えに感謝し、その気持ちを忘れずに、ハンドボールを通じて子どもたちに伝えていくつもりです。



## 創部30周年での全国大会出場

この年は、上庄ハンドボールクラブ創部30年の節目となるメモリアルイヤーであり、何としてでも花を添えられるような好成績を全国大会で残す事を目標にチームはスタートした。

チームは、鎌仲大夢、鎌仲奏太郎の二人のロングやミドルシュート、澤井伸昂のサイドシュートと上からサイドからと自在に点が取れ、キーパー中居寛人を軸とした鉄壁のディフェンスで6年生が中心の最高のチームだった。このようなチーム編成で臨んだ県内予選は敵なしで順当に勝ち上がり、全国大会の切符を得た。

目標としていた全面青色の全国大会のコート、緊張しながら臨んだ全国大会の初戦、三重県代表の羽津HB少年団と対戦。自分達の持ち味を發揮し、23-8で大勝となった。この勢いで臨んだ2戦目は、愛媛県代表の愛媛ジュニアーズと対戦。2戦目ともなれば緊張もほぐれ、27-5で初戦に続き大勝で予選突破となった。

決勝トーナメントの初戦、鹿児島代表の霧島ジュニアHBCとの対戦。さすがは全国大会の決勝トーナメントに勝ち上がるチームであり、予選リーグの相手とは違い、なかなか点差を広げる事が出来なかった。しかし、キーパーのナイスセー

### 上庄ハンドボールクラブ 西田 豊

ブ、要所でのロングシュートもあり、19-16で勝ち切ることが出来た。2回戦目は、同じ北信越ブロックでこれまで何度となく大会や交流会で戦っている福井県代表の北陸電力ジュニアブルーロケットとなった。相手の戦法もある程度は理解できている為、攻撃を抑え込みながら、持ち前の得点力を發揮し、25-9と勝利し、準決勝に駒を進めた。

真夏の京都、敵は対戦相手だけでなく、京都特有の暑さもあった。これまで、試合前のアップは、体育館横の屋外で調整し、準備してきた。しかし、準決勝当日は、気温も上昇し35℃を超える暑さになり、大会事務局からも屋外でのアップが禁止され、会議室で待機させられるなど、選手達のコンディション調整が大変だった。

このような環境の中、準決勝の相手は、幾度と全国優勝をしている沖縄県代表の神森HBCとの対戦。持ち前の攻撃力で1セット目は1点リードでスタートしたものの、2、3セット目は沖縄県のチーム独特のリズム変化のプレーへの対応に苦労しリードされてしまい、残念ながら14-20で決勝進出の夢は断たれてしまった。

気持ちを切り替えて臨んだ3位決定戦。この時



の相手も全国大会で優勝経験のある大分県代表の玉名町小学校。準決勝での敗戦後、もう一回モチベーションを高めて、絶対勝ち切ると強い気持ちを持って臨んだ。1セット目から、得点力、守備力で終始リードし、勝利を勝ち取り、見事3位で銅メダル獲得となった。

目標であった全国制覇とはならなかったものの、創部30周年のメモリアルイヤーに好成績を残した選手達の頑張りに称賛したい。

また、この好成績は日頃から選手たちのサポートや大会での応援など、父兄、OB・OG、地域の方々の協力や氷見市協会をはじめ、上庄児童クラブなど多くの団体からの支援があつてこそ、全国大会での3位に繋がったと感じており、感謝しています。

選手達には、全国大会での経験と優勝を逃した悔しさをバネに、次のカテゴリーで更なる成長と活躍を期待してやまない。

上庄ハンドボールクラブもこの成績に甘んじる事無く、更なる上の成績が残せるよう、伝統を受け継ぎながら、日々選手達と共に成長していきたいと思う。

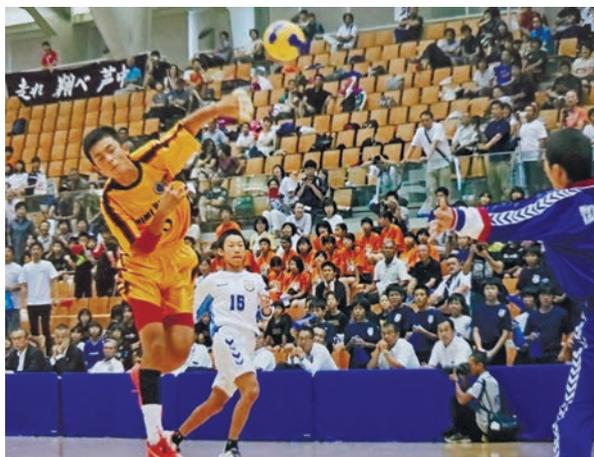


## 夏の思い出

朝野 暉英

中学3年の夏、石川県で行われた全国大会に出場した。春に行われた全国大会では、ベスト8で終わってしまったため、夏にかける思いが強かった。春の全国大会が終わってから、選手一人一人の練習に対する姿勢が明らかに変わった。日々の練習では、ミスに対する指摘や責任感が増え、チーム全体のレベルが少しずつ上がっている感覚があった。監督の小嶋先生やコーチの中川さんが丁寧に指導してくださっていた。全国大会当日、初戦の相手は、香川第一中学であった。強豪との対戦であるため、ミーティングを丁寧に行った。試合では初戦ということもあり、ミスが多くあった。自身も調子が悪く、思うようにプレーできなかった。しかし、頼り甲斐のあるチームメイトの活躍によりなんとか勝つことができた。その後、試合に勝つにつれてチーム力がますます増えていった。順調に決勝戦まで勝ち上がり、対戦相手は、愛知県の強豪、滝ノ水中学であった。試合前、緊張よりもこのチームで試合をするのが後1試合だと考えると寂しい気持ちと、絶対に勝つという強い気持ちが芽生えた。応援席を見ると、保護者、チームメイト、これまでお世話になった方々がいた。コート選手、ベンチ、応援席が一体となり、「チーム一丸」を初めて実感した。チーム全員で戦い抜き、優勝することができた。今思い返すと、一つ一つの取り組みが日本一に繋がったと思う。監督、コーチの丁寧な指導、保護者の熱心な応援、先輩方が積み重ねた伝統、選手全体で協力し辛い練習を乗り越えたことなどである。小中高とハンドボールの聖地氷見でプレーしたが、改めて氷見のハンドボールは素晴らしいものだと感じた。小中高全てのカテ

ゴリーが全国トップレベルで活躍し、その選手たちが将来指導者となり、この氷見のハンドボールの伝統が続いている。私はこの環境でハンドボールができていたことが本当に光栄なことだと感じている。これからもこの氷見でプレーしたハンドボーラーが全国、世界で活躍していくことを願いつつ、自身も頑張りたいと思う。



## 全国制覇

### 堀 緋奈乃

“全国制覇”これは、私たちがハンドボールを始めたときから抱いてきた目標でした。それだけに、この目標を達成した、あの瞬間、あの光景は今でも強く心に残っています。

この年の十三ジュニアの強みは、「バランスのよい得点力」、「攻撃的なディフェンス力」でした。前の年から試合に出ているメンバーが多く、オフenseは、どこからでもチャンスをつくったり、得点を決めたりと攻撃のバランスがよかったです。色々な練習をしましたが、多くの時間をパス&キャッチの練習に費やし、“つまらないミス”をなくそうと反復して基礎練習に取り組んでいました。ディフェンスは、高い位置でプレスをかけ、相手のミスを誘ったり、速攻につなげたりするために、3:3ディフェンスを強化しました。当時は0:6、1:5ディフェンスが主流の中、攻撃的なディフェンスに取り組んだことがよい結果につながったのだと思います。毎日、パス&キャッチの練習やフットワークの練習など、地道な練習を何度も何度も繰り返しました。練習は今でも「つらかったな…」と思い出します。でも、「あの基礎的な練習が大切だったんだ」と中学校、高校でハンドボールをした今だからこそ、その大切さに気付くことができました。

いよいよ迎えた全国大会。1回戦、2回戦ともに「守って速攻」で優位に試合を進め、勝つことができました。準々決勝は地元京都の田辺小学校済美館クラブ。相手の堅い守りと地元の大声援に苦しめられましたが、1点差で勝ちました。この接戦をものにしたことでチームに勢いと自信が生まれたように感じます。その勢いのまま準決勝で群馬ジュニアハンドボールクラブに勝ち、決勝戦へと駒を進めました。むかえた沖縄県代表のコザJrハンドボールクラブとの決勝戦。開始早々、3連続得点で勢いに乗りました。劣勢の場面もありましたが、「前を意識した」オフense、「足で守る」ディフェ

ンスが機能し、終始5点をリードしたまま終盤へ。家族や地元の方々などの大応援にも後押しされ、最後まで楽しんでプレーすることができました。そして、試合終了の時…。終了のブザーが鳴った瞬間、京田辺のグリーンコートで仲間と喜び抱き合った光景を今でも鮮明に覚えています。

「シュートを決めたい!」「試合に勝ちたい!」そんな純粋な気持ちでハンドボールに取り組んだ小学校時代。最高の仲間や指導者の方々、家族のおかげで最高の結果にも巡り会うことができました。この経験はずっと忘れることのない大切な思い出です。



## 選抜大会を終えて

椎木 尚祐

高校2年の春、兵庫県で行われた選抜大会に出場した。昨年の先輩達の代で選抜大会準優勝とあと一步のところまで法政二高に敗れた。昨年の思いもあり今回の選抜大会への思いは一段と強かった。1回戦は市川高校だった。よく練習試合をする仲で対策を練られ前半から苦戦した。みんな固かった。何とか後半で点差をつけて初戦突破した。その後の2回戦も調子が上がらず思うようにプレーができず試合が運ばなかった。

その日の夜にミーティングで徳前先生が「勝つことも大事だけど、固くならずまずは自分達のハンドボールをしよう」と話してくれた。それからみんなの気合が入り3回戦、4回戦と危なげなく勝ち進むことができた。

そして迎えた決勝戦。相手は駿台甲府高校で、よく練習試合をする仲でお互いよく知る相手だった。試合前、みんなで円陣を組み絶対優勝するんだ!と思いを1つに試合へと挑んだ。前半、パスカットから裕翔が先制点を上げると光佑からの速攻で2連取発信。リードを広げていった。同点に追いつかれながらも前半を5点差で終えた。後半は、最初から自分達のペースを保ち試合終了のホイッスルになった。ホイッスルになった瞬間、ベンチも飛び出しコートの上で仲間と抱き合った。本当に嬉しかった。今まで自分達を信じ必死に練習してきたことが実った瞬間だった。

振り返ると昨年のインターハイの悔しい経験から血の滲む練習をし、良い時も悪い時もありその度にチーム一

丸となって乗り越え掴んだ優勝だった。新たな練習方法を取り入れ、ウエイトトレーニングの時間を増やし、食事管理を徹底的にし、身体を作ってきた怪我もなくこられたことが大きかった。これらも含め、監督、コーチの熱い指導、充実したスタッフ、父兄の方々、先輩、地元の方々の応援、支援があったからこそだと思う。心から感謝したい。

ハンドボールの聖地氷見でプレーを始め、最高の環境で育ててもらったことに本当に感謝したい。日本一になった経験を活かしこれからの氷見を日本のハンドボールをもっと盛り上げてメジャーにしていきたい。



## 三重インターハイの挑戦

氷見高校 徳前 紀和

3月の選抜大会をスコア的には大差で優勝して、周囲は「今年の氷見は他を圧倒している」という評価を下していたようだった。しかし、私らスタッフ間では、多くの課題が浮き彫りになる大会となった。

一つには、ポジションごとの得点バランスが悪く、夏までに様々な対策を取られる可能性が高いこと、速攻が組織的に機能していないこと、ディフェンス面においても真に確率の高いディフェンスシステムが完成していないこと、フィジカル面でも炎天下でのコンタクトに堪えられる身体がまだ出来上がってないこと等々である。

これらを解決するために、選抜大会から帰って、これまでも大切にしてきたコンセプト「進化し続けること」を実践すべく、トレーニングに入った。ポストの下半身を使った身体さばきの稚拙さを解決するために、帰郷後即座に「四股」を活用したトレーニングに励んだ。唐戸山相撲の大関の宮下さんの熱心な指導を受け、選手たちは、その必要性を十分に理解し、自ら精力的に取り組むように進化した。また、速攻のトレーニングも、選手個々人が持つ、個人の特性を最大限に活かすため、コース取りやボール展開の基本形、応用形、進化形とトレーニングを重ね、徐々にスムーズな判断へと進化していった。

「変化に対応する力を高めること」を、チームの大切な理念に掲げており、ディフェンスのシステムやポジション、万一怪我があった場合の対策など、あらゆる局面を想定してのトレーニングも徐々に進化していったように感じて

の現地入りであった。「変化に対応すること」にかけてはかなりの習熟はあったが逆にベースとなる一線ディフェンスにポジションを含めて一抹の不安もあり、大会では毎試合後の翌日に向けてのミーティングにおいてもセンターバックの配置が日替わりになる、ある意味不安定さもある大会となった。

最大の山場は、最大の仲間でありライバルである北陸高校との準決勝であった。練習試合で互いの手の内を十分に知り尽くし、まさに環境や変化に対応する力の競い合いとなった。ある程度の予測もあったが、スタートでエースGKが相手サイ



ド陣に対して翻弄される展開となり、この状況を1年生GKが見事に救いながらペースのつかみ合いの展開となった。前半終了場際から、徐々にオフェンスでの安定感が相手を上回り、楽な展開ではなかったが、死に物狂いの相手を丁寧な試合運びで制することができた。

決勝前日、NHKのドキュメント番組が密着取材する異様な雰囲気の中ではあったが、ここまでくれば、選手・スタッフで心底共有している価値観、「いつもの通り!」「負けてもいいやん!」

(誤解のないよう注釈をつけると、日頃から常に伝え続けてきた価値観『勝負の世界、勝ちも負けるもあり。結果より、プロセスに真の価値がある』さあ、楽しんで大好きなハンドボールをやるぞ!の意)で戦い切り、念願の16年ぶりのインターハイ優勝へとたどり着いた。振り返れば、選抜後に課題と上げていたことの多くを、選手が自らの努力でクリアできていると感じさせていた大会であった。多くの方々の力を協働して、共に感激を味わえたこと、素敵な経験をさせていただいたこと、選手、多くのスタッフの皆様とともに、厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。



## 自分たちとの戦い、自分たちの取り組みへの自信へのchallenge！三冠へ

氷見高校 徳前 紀和

キャプテンでセンタープレーヤー安平中心の西條中学が春中、全中と優勝を飾るも、最後のJOCカップでは、安平の怪我での離脱もあり、敗退となってしまっていたこともあり、この大会はプレッシャーのかかる大会になることは十分感じていました。しかも、独特のホーム&アウエーがある国民体育大会、そのホームチームは最大のライバル北陸高校。さらに決勝の舞台は、新装なったばかりの5000人収容の福井県営体育館。

大会入りして直後、練習もせずに、決勝を戦うであろう福井県営体育館へ向かい、「ここが大観衆になり、ほぼほぼ応援は相手の味方、しかもこちらはタイトルホルダー！そのプレッシャーの中、どれだけ楽しんで大好きなハンドボールができるか、楽しみやな。しかも、会場全体が地元びいきや……」と、選手たちに語りかけながら会場視察をしました。その5日後、まさに、予想していた通りの状況が待ち受けていました。アップを終え、こっそり会場を覗く選手たち、「あ、まさに！」でした。でも、ここからが、彼らの真骨頂、「よしっ！やったるわい。」かつて、自分が高校生だったころ、「氷見の獅子舞回してこい！」と先生や先輩方に背中を押されて向かった勝負の

コートを思い出しました。幸い、そんないい意味の緊張感でスローオフを迎えました。

相手の北陸高校は、この試合に、1年間のいやこの国体決勝をイメージして数年間、取り組んできたであろう、と容易に想像できました。氷見高校としては、これまで大切にしてきたこと、①あたり前を高いレベルで②自分で身に付けたものこそ真の力③状況の変化に対応する力こそかつ秘訣の3つを楽しんでやるよう共有して試合に挑みました。この一年間、14試合目、どの試合よりも、コントロールタワー安平へのマークが巧みで、チーム全体としての対応も後手に回る感じの展開で進みました。しかし、これまでも自らの現在地を見つめ、各自の目標に向かってそれぞれで取り組んできた成果が、こんな土壇場でも発揮されます。清水が将来を見据えて、地道に取り組んできた身体づくりの成果か、目を見張るようなロングシュートを連打し、チームとしての動きは固いながらも、得点を積み上げていきます。まさに、自分で掴んだものこそ、真の力であることを知らしめてくれています。大会を通して体調不良に苦しんだ窪田も徐々に力を発揮してきます。

完全アウエーの雰囲気、あり得ないことも



発生しますが、「変化に対応する力」は、状況のいたずらにも飄々と対応できています。試合は接戦ですが、ゲームをコントロールできていました。ラスト40秒、1点リード、この一年間で初めて取ったタイムアウト！

キャプテンの安平の真骨頂。「ここから、35秒展開する。最後は礼央、サイドシュート打て！思いつき、スタンドに投げろよ。絶対、ゴールに向かって打つなよ。」私は、なんと凄い選手と一緒にハンドボールできたのか、と勝利を確信したものです。

タイムアップ。様々な思いが込み上げてきました。周りにカッコいい選手たちと素敵なスタッフが！

酒井コーチ、谷内口先生、矢田部先輩、笠尾先生、舘川栄養士、フィジカル指導の井口先生、北岡ドクター、多くのスタッフの皆さんのたゆまぬ選手への愛情に心より敬意を表します。また、献身的に物心両面で支え続けてくださった選手の

保護者、家族の皆様方、ハンドボール協会関係者、OBの皆様、そして応援いただいた多くの皆様方に敬意と感謝をこの場を借りて改めて申し述べさせていただきます。繰り返しになりますが、

- ① あたり前を高いレベルでやること
- ② 自分で身に付けたものこそ真の力
- ③ 状況の変化に対応する力こそ勝つ秘訣

最後に多くのことを学ばせてくれた選手のみんなに心から感謝を申し述べたいと思います。本当にありがとうございました。



## 忘れられない夏の全国大会と仲間たち

畑中 大靖

赤色のメガホンに音の鳴るペットボトルを手に持ち、白色のお揃いのチームTシャツで統一された応援団。その熱気あふれる一体感は、今でも鮮明に思い出されます。これは神戸で開催された夏の全国大会での話です。

誰もが知る安平光佑選手を全国優勝に導いた三崎監督と長年に渡り氷見北部中学校ハンドボール部を牽引していた中川コーチの元で私たちは、「全国制覇」を目指し、日々厳しい練習に取り組んでいました。

春の全国大会で3位に終わった悔しさがあったからこそ、チームメイトたちは弱音を吐かず、前を向いて練習に打ち込んでいたことが思い出されます。

そして迎えた夏の全国大会。初戦から集中して取り組むよう指示があり、アップから声を出して気持ちを高めました。春からの4ヶ月間で練り上げたシステムが見事に機能し、順調に得点を重ねていきました。その勢いのまま、私たちは準決勝へと進出しました。

しかし、準決勝では相手チームに私たちのシステムを次々と封じ込められ、終始リードを許す苦しい展開に。最終的に1点差で敗れましたが、この試合はハンドボールの難しさを痛感させるものでした。コミュニケーションのミス、シュートミス、パスミスなど、多くの「ミス」が重なりました。それでも、コートに立つ選手たちはミスを取り返そうと必死にボールを奪い、ゴールを狙い続けました。あの頃の私たちは、勝利に対する貪欲さとハンドボールを楽しむ気持ちを心から持っていたのだと感じています。

試合終了のブザーと同時に座り込んだチームメイトに、相手チームの選手が手を差し伸べる素晴らしい光景は、今でも鮮明に覚えています。「ごめん」と飛び交う声を聞き、私は主将としての責任を強く感じました。春に続いて再び味わった

悔しさ。それは1点の重みを理解する経験となり、今後のハンドボール人生でこの悔しさを晴らすことをチームメイトと誓いました。

30℃を超える猛暑の中、声を枯らして応援してくれた応援団と、私たちをこのステージまで導いてくれた監督、コーチには感謝の気持ちでいっぱいです。最後に、ハンドボールの町・氷見市でハンドボールを学び、成長できたことに幸せを感じています。そして、今それぞれのステージで活躍しているチームメイトの話聞くたびに、誇らしい気持ちになります。私も皆に負けないよう、さらに成長していきたいと思っています。



## 第16回春中ハンド優勝

中川 英明

ハンドボールの全国大会での優勝は、指導者としても選手たちと共に歩んだ至上の喜びであり、充実した瞬間です。私が指導するチームが出場した全国大会では、数々の挑戦と成長が詰まった感動的なストーリーがあります。

新型コロナウイルスの流行により、15回大会に引き続き中止かと思われていた16回大会が開催されることになり、先輩たちの思いも胸に優勝を目指して挑みました。初戦からライバルチームが非常に強力なので、我々のチームは出来る限りの準備を整えました。

しかし、優勝に至るまでの道のりは予想以上の困難を伴うものでした。主力メンバーの怪我やメンタル面での不安定さなど、多くの困難に直面しました。しかし、私たちはそこでチーム全体の結束力と、プレーの質を向上させるための戦術的なアプローチを強化しました。選手たちは失敗から学び、次に繋げる姿勢を示しました。

2回戦、大阪の豊中三中に27-17

3回戦、宮崎の祝吉中に20-14

4回戦、沖縄の浦添中に26-22

ベスト4に入り、迎えた最終日。東京の東久留米西中との準決勝を、25-23で勝利し決勝進出を決めました。ふれあいスポーツセンターメインアリーナのセンタコートで行われる決勝戦の相手は、茨城の土浦三中でした。その試合では、選手たちがこれまでの経験と練習の成果を存分に発揮しました。チーム全体が一体となり、相手チームに対して圧倒的なプレッシャーをかけることに成功しました。結果は延長の末、私たちのチームが優勝するという素晴らしい

いものでした。その瞬間、コート上で選手たちが抱き合い、喜びに満ちた涙を流す姿を見て、私も涙がこぼれました。試合をする毎に選手たちが成長し、最高のパフォーマンスを発揮できたことに心から感謝しました。

春中ハンドでの優勝は、私たち指導者にとっても大きな達成感と喜びをもたらしました。選手たちの努力と成長を見届けることができたのは、私たちにとって何よりも貴重な経験でした。私自身2回目の日本一でしたが、地元氷見での胴上げは格別なものでした。



## 全国大会で銀メダルとともに得たもの

井上 拓己

僕は小学校2年生の時に友達に誘われてHC宮田に入り、ハンドボールを始めました。当時憧れだった、優しくて強い先輩たちの姿を目標に日々練習に励んでいました。練習では、基礎をしっかりと教えてもらい、よく考えてプレーするようにしていました。その結果、4年生になると先輩が少人数だったのもあり、試合に出させてもらえることが多くありました。

そんな中、新型コロナウイルスが流行した影響で休校になり、練習ができない、仲間にも会えない日々が続きました。しかし、自分にできることを考え、ランニングをしたり、こっそりと学校のグラウンドでシュートを打ったりしていました。そして、休校が明け練習が再開した時のハンドボールが、ものすごく楽しかったのを覚えています。全国大会への出場が決まると、より一層日々の練習に力をいれました。もう卒業してしまった先輩たちが練習にきてくれたりして、チームとしてもだんだんとレベルアップしていきました。

そうしてむかえた人生初の全国大会。休校が明けたといってもまだコロナは流行し続けた中で全国大会でした。そのため声出し応援の禁止などいろいろな規制がかかっていましたが、コートの中はどの時代とも変わらず熱気に満ちあふれて

いました。僕らは2回戦目からの登場で初戦は強豪・沖縄の神森ハンドボールクラブとでした。スタートから点を取りあう白熱したシーズンゲームになりました。しかし暑い夏の大会にそなえて練習では毎回ラントレをしていたので最後まで走りぬいてくらくすることができ、後半残り30秒同点の場面、僕のカットインで1点リードし僕らのキーパー浜下君のナイスセーブで守り切りこの初戦を突破しました。このときほど、ハンドボールを続けてよかったと思ったことはありませんでした。そしてそのまま流れにのった僕たちは愛知の東海ハンドボールスクールにも競り勝ち、準決勝まで進みました。準決勝からは夢にまで見た青いコートで試合ができました。準決勝は京都の薪ハンドボールクラブとの試合でした。序盤に大量に失点し、5点差まで広げられました。そこでディフェンスのシステムを変えることで相手の攻撃を抑えることができました。しかし点数が入らないので点差が縮まらない苦しい時間が続きました。そんな中、秋田君のサイドシュートが決まり始め、チーム全体が波に乗り、前半で1点差までつめました。後半もそのままの勢いで試合をすすめて、6点差つけて勝利しました。決勝は僕らが負けたことのあるチームを準決勝で破った茨城の豊



里HCとでした。はじめは神森と同様、点をとったりとられたりする展開になりました。しかし、僕らが3日間戦ってきて体は限界寸前だということに対し、相手はそのようなそぶり一切なくプレスディフェンスを仕掛け続けてきます。その気迫におされ徐々に点差をつけられ、3点ビハインドで後半をむかえました。「さっき5点差を追いついたんだから今度だって」「とるなら銀より金だろ!」と気を吐いたのもつかのま、相手に地力の差を見せつけられ優勝には届きませんでした。

全国大会を通して、貴重な経験をたくさん積むことができました。神森戦ではハンドボールの面白さを、新戦ではあきらめないことの大切さを学ぶなどすることができました。優勝を逃したのは悔しかったけれど、負けたら終わりという緊張感のなかでより強いチームと試合ができて楽しかったです。

僕は今、全小初優勝の夢は後輩にたくし、西條中ハンドボール部としてキャリアを続けています。次なるステージ、地元・富山で開催される次の全中に向けて宮田で学んだ「考える、あきらめない、

そして楽しむ」ということを大切に、日々努力していきます。そして、その舞台で我々史上最高の記録をたたきだす、すなわち、優勝することが今まで支えてくださった監督・コーチや家族への最高の恩返しだと思います。感謝の気持ちを忘れずにプレーし続けたいです。



## 春中ハンドに出場して

林 伸恭

SKC氷見は、ハンドボールがしたいけれど中学校に男子ハンドボール部がない子どもたちのために2021年から本格的に活動を開始したクラブチームです。

創部から2年目、3年生が引退すると部員は6人になりました。試合をするには一人足りない人数です。個人の技術もまだまだ未熟なチームでしたが、春中出場を目指すことになりました。氷見市から出場できるのは最大で2チームで、その中に入るためには何が足りなくてどんな練習が必要なのか全員で確認しながら週3回の練習に取り組みました。

県代表決定戦に出場できるのは、市内4チームの総当たり戦で行われる冬季大会の上位2チームだけです。初戦の西條戦を落としたSKC氷見は、もう負けられません。西の杜戦、北部戦と連勝し、最後の南部戦は、お互いに2勝1敗で並んでおり勝ったチームが県代表決定戦への出場が決まります。何度も一緒に練習してきた南部はお互いに手の内を知り尽くしていました。序盤から一進一退の攻防でなかなか点差は広がりません。前半を1点リードで折り返しましたが、まだまだどうなるか分からない状況でした。後半に入ってもリードしたりされたりのシーソーゲームで気の抜けない時間が続きます。1点リードで残り14秒となった時点で相手がタイムアウトを取ります。最後の攻撃に何か作戦を立ててくることは分かっていました。体力も限界に近い選手でしたが、最後まで集中力を切らさずに守ることで相手のシュートミスを誘い1点差で勝利をおさめました。ぎりぎりの勝負を何とか制し県代表決定戦への出場を決めました。氷見市で上位を目指すことの難しさを感じる大会でした。

県代表決定戦では、硬さが見られた初戦でしたが、後半に運動量の違いを見せつけ危なげなく勝

利しました。準決勝は速さが持ち味の堀川戦です。しかし、6人で戦う2試合目は、消耗した体力が回復せず、前半から動きが悪く徐々に点差をつけられていきます。自分たちのペースをつかみたいと思いつつも流れに乗れず前半を13対17の4点ビハインドで折り返しました。後半、疲れの見た相手に粘り強く戦いましたが、前半の差を詰められず4点差のまま負けてしまいました。翌日の3位決定戦では、呉羽を相手に前半から攻撃の手を緩めず、29対17で快勝し3位となり、春中初出場を決めました。

大会開催までの2か月間は、あっという間に過ぎていきましたが、全国から集まる強豪を相手に一人少ない人数でどう戦うかを確認しました。相手の2倍、3倍の運動量でカバーできるよう体力強化にも励みました。

氷見市からクラブチームとして初めての出場。周囲の視線もこれまでとは違ったものだったかもしれません。さらに一人少ないということもあり、それなりに注目されての出場でした。2回戦からの登場となった子どもたちは、初めての大舞台で緊張していたこともあったのでしょうか。これまで何度となく試合をしてきたふれスポの会場がいつもとは違う雰囲気に包まれていました。硬さの取れない開始早々、相手に先制点を決められます。その後も相手の連続得点があり0対3とリードを広げられました。開始から3分30秒、パスカットからの速攻で1年生平井がシュートを決め、ようやく初得点をあげました。しばらくは取っては取られての展開が続きましたが、自分たちよりも身長の高い相手に攻め込むことができず、徐々に点差を広げられていきます。前半15分には7対16と9点差をつけられてしまいました。それでも相手の退場を機に得点を重ね、5点差まで詰めましたが、相手もクイックスタートからの速攻やロン

ダシュートなどで11対19と8点差で前半が終了します。ハーフタイムでは、攻撃の単調さや相手との距離感を確認したり、選手間でうまく機能していない部分を話し合ったりして修正しました。後半はSKC氷見のペースで始まり、後半7分には4点差まで詰め寄ることができました。しかし、そこからは点差がなかなか縮まりませんでした。選手たちは最後まで変わらない運動量で、コート内を走り回り、ポジションチェンジを繰り返しながら多彩な攻めを見せました。キーパーの好セーブも多く見られましたが、前半の点差を埋められず、26対34で勝利とはなりませんでした。

初めての出場だった春中は、悔しい結果ではありましたが、一人少ない中でも自分たちのハンドボールを信じ、最後まであきらめることなく走り続けた選手は、見ている人たちにも感動を与えてくれたと思っています。この春中出場が、ハンドボールをしたい生徒が集まるクラブチームとして広く知ってもらえることができればと思います。



## 走りぬいた夏

## 氷見市立北部中学校 小坪 夏星

中学2年生の時、全国大会への切符を勝ち取ることができた。しかし、感染症の影響により、自分だけ参加することができず、とても悔しい思いをした。その思いの分も3年の夏に懸ける思いは強かった。北信越大会を優勝し、徳島県で開催された全国大会へ出場することができた。

会場は、全国各地から集まるチームの熱気で溢れていた。私たちの試合は、2回戦からのスタートだった。相手は、全国大会常連校である沖縄県の神森中学校だ。初戦ということもあり、みんながかなり緊張している状態だった。思ったように足が動かず、前半は一進一退の攻防が続いた。後半は、少し緊張もほぐれ、いつもの自分たちのリズムで試合を進めることができ、29対22で初戦を突破することができた。3回戦の相手は、岩手県の矢巾中学校だった。試合初めから持ち味である守りからの速攻で点を重ね、どのポジションからも得点することができた。後半も、自分たちの勢いを止めることなくプレーすることができ、ゴールキーパーのナイスセーブにも助けられ、32対18で勝利することができた。この試合はメダル獲得がかかっている試合だった。試合前に、「ここを勝たなければメダルはない。絶対に勝とう。」とみんなで話をしていて、この試合にかける思いはとても強かった。そして、準決勝。相手は、春中を準優勝している熊本県の鶴城中学校。試合する前からとても強いチームであることを知っ

ていた。名前を聞いただけでも緊張した。私は、「自分が一番点数を決めて勝ちに導くぞ。」という気持ちでいっぱいだった。試合前にミーティングを行い、全員で戦い方を確認した。試合開始までの時間が近づいてきて、胸の音がだんだんと高鳴っていることが自分でも分かった。試合開始の笛がなり、試合が始まった。試合スタートに、私たちが一番恐れていた自分たちのミスからの逆速攻で相手に点を取られ、離されてしまった。私は、「名前に圧倒されてはいけない。」と思い、いつも以上に積極的にゴールを狙った。ハーフタイムに先生から「思いっきり楽しんでこい！」という言葉をいただき、みんなの引きつった顔が緩んだ。後半になり、みんなの笑顔が増えた。全員で一点一点を積み重ねながら、食らいついていこうと頑張ったが、試合終了の笛がなり、負けてしまった。その瞬間、自然と涙が溢れてきた。「もうこのメンバーで戦えないのか。」と思うと、とても悲しい気持ちでいっぱいになった。しかし、悔いは一つもなく、すっきりとしていた。

ここまで来ることができたのは、チームメイトに恵まれ、たくさんの方々に支えられていたからだと思う。関わってくださった全ての人たちに心から感謝したい。そして、この経験は、私の人生の中で一生の宝物になった。この経験を、今後の人生に生かし、次のステージでは、叶えられなかった「全国制覇」という目標を、絶対に成し遂げたいと思う。



## インターハイに出場して

### 氷見高校男子ハンドボール部キャプテン 本川 拓斗

私が氷見高校に入学する前、ハンドボール部は選抜大会、インターハイ、国体で優勝し三冠を達成していた。そんな強いチームの一員になることに、大きな期待と不安をもって入部した。日本一になるためには、技術面の向上はもちろん、当たり前に行えることのレベルを高くし、変化に対応する力を伸ばす必要がある。私達は練習の一つひとつに対して、目的や理由を考えて真剣に取り組んだ。繰り返し練習することで意識していたことが無意識でできるようになり、それが当たり前に行えることのレベルを高くした。

そして、3年生になりインターハイ予選に勝利し、インターハイ出場を決めることができた。とても嬉しかった。目標に向かい全員が協力し、チームの士気は最高潮に高まっていった。しかし、キャプテンである私は北信越総体で足を怪我してしまい、高校ではまともにハンドボールができなくなってしまった。私以外にも怪我人が出て万全ではない状態でインターハイの会場に足を踏み入れた。1, 2回戦では強豪校に僅差で競り勝ち、3回戦へと駒を進めた。3回戦は、春の選抜大会で準優勝に輝いた茨城県代表の藤代紫水高校だった。誰もが相手の勝利を予想していたと思う。試合が始まると序盤から、これまで身につけてきた相手に対応する力を発揮し、得点を重ね、リードして前半を終えた。後半に入っても得点を重ね、GK陣の好セーブの連発もあり、強豪校にリードを許すことなく勝利した。私は怪我の影響でベンチから見守ることしかできないと思ってい

たが、この試合で7mスローを打ち、インターハイ初得点をあげることができ、私にとって記憶に残る一戦となった。その後、チームは準々決勝でも接戦をものにし、準決勝では春の選抜大会3位だった香川中央高校と対戦した。序盤から相手にリードされる厳しい展開が続いた。私達は、ディフェンスシステムやメンバーを変えて対応し、最大9点差あった点差を徐々に詰めていき、後半には逆転に成功した。それでも、選抜大会で3位だった実力を発揮する香川中央高校の強力なオフェンスを止めることができず、逆転され1点差で敗退した。ただ、敗退はしたもののインターハイ前にチームで掲げた「メダル獲得」という目標を達成することができ、氷見に帰ってきたときには清々しい気持ちだった。

これからも氷見高校ハンドボール部で身につけた、学んだりしたことを今後の進路に生かしていきたい。そして日々応援してくださった方々への感謝の気持ちを忘れず恩返しできる存在になりたい。



## 春・夏の全国大会に出場して

西條中学校男子ハンドボール部主将 井上 拓己

僕たち西條中学校男子ハンドボール部は第19回春の全国中学生ハンドボール選手権大会に出場しました。例年なら氷見市で行われる春中ハンドですが、今回は令和6年能登半島地震の影響で氷見市での開催は中止となりました。そんなときに福島県が代替開催を引き受けてくださいました。新チーム結成以来、まずは春中ハンドを目標に練習を重ねていたのが貴重な機会を与えてくださったことに感謝の気持ちでいっぱいでした。「大会が開催されることへの感謝を忘れず、優勝の報告で被災した氷見市に元気と勇気を届けよう。」そんな気持ちで挑んだ春中ハンド。始めは全国大会の雰囲気に慣れず、硬いところもありましたが、徐々に緊張もほぐれ、準々決勝までコマを進めることができました。準々決勝からは少し苦しい展開となりましたが、仲間でカバーし合って、決勝まで進むことができました。決勝戦は、東京都の東久留米市立西中学校と対戦しました。東久留米西中学校とは何度か対戦したことがあり、その時は勝ったり負けたりしていました。ライバルと呼べる対戦相手。氷見から駆け付けてくださった保護者と、同じく出場していた西條女子チームの大声援。センターサークルのHimiの文字。まさに、決勝にふさわしい素晴らしい舞台が用意されました。試合は、0対5と最悪の滑り出しになりましたが、監督・コーチの的確な指示で落ち着きを取り戻し、前半のうちに同点まで追いつきました。後半は、2点差以上開かないシーソーゲームとなりましたが、ウイング橋本の得点と、キーパー戸圓のビッグセーブで、優勝を収めることができました。大会前に言っていたように、優勝の報告で氷見に元気と勇気を届けられたのではないかと思います。

そしてチームは、結成時の目標である春夏二冠を

達成するために、再出発しました。北信越大会を優勝し、順調に夏の全国大会出場を決めました。第53回全国中学校ハンドボール大会は、氷見市で開催されました。僕たちは、2回戦からの登場となりました。地元開催ということもあり、西條中学校の生徒や先生方、地域の皆さん、県内の出場できなかったチームまで、大勢応援に駆け付けてくださいました。初戦は、硬さが見られる滑り出しとなりましたが、無事勝利することができました。次戦からは、緊張がほぐれ西條らしいハンドボールで決勝まで危なげなく勝ち進みました。

決勝の相手は春中ハンドと同じ、東久留米市立西中学校でした。決勝にはさらに多くの方が応援に来てくださり、迫力のある大声援の中での試合となりました。試合はエース大浦のミドルシュートで先制すると、持ち味の速攻で一時5点リードしました。しかし、前半終了間際に連続得点を許し、1点差で後半を迎えます。前半最後の悪い流れを後半になっても切ることができず、最大5点リードされてしまいます。それでも懸命に走り続け、残り30秒で1点差まで食らいつきます。しかし、最後は相手のエースに決めきられ、タイムアップのブザーが鳴りました。東久留米西中学校の選手の胴上げを見ると悔しくて涙が止まりませんでした。負けたことは悔しかったですが、大声援の中で全力でプレーできたことは楽しかったです。

最高のチーム、最高のライバル、最高の応援団、あの試合を忘れることはありません。これからもハンドボールを続け、常に上を目指すつもりです。この先、くじけそうなとき、春中ハンド優勝の感動と全中準優勝の悔しさを思い出して頑張りたいと思います。



春中ハンド 優勝



全中のワンシーン



大迫力の応援団

### パリ五輪アジア予選を終えて

安平 光佑

36年ぶり自力で五輪出場、日本のハンドボールファンの悲願の思いが詰まったアジア予選決勝。相手は、予選リーグでわずか一点差だった、バーレーンだ。「悔いが残らないように、骨が折れても突っ込んでいく」そう思いながらプレーをする、そう心に決めた。予選から試合を重ねて勝つたびにチームの士気はあがりとても良い状態だった。コートに入ると現地の日本人の応援団の方が多いことにとっても驚いた。アウェーの中とても心強くより一層気合が入った。試合開始からポストの吉田との連携が面白いように上手くいった。波に乗っていたさなか、激しいあたりを受け鼻血が出るアクシデントが起きた。トレーナーに「多分折れている」と言われたが勝ちたい、最後までコートに立ち戦いたい思いが強く関係なかった。一旦ベンチに下がって仲間の戦っている姿を見ると誇らしく、なおさら下がるわけには行かないと思った。アクシデントにみまわれた前半だったが、リードして終わり後半を迎えた。

前半では、緊張とプレッシャーに押されていたチームメイトも活気を取り戻していた。追いつかれながらも4点差で勝ち抜いた。試合終了の笛がなったと同時に、これまでの色々な思いが込み上げてき、涙が溢れた。実感が湧かなかったが、歓喜に溢れて仲間と抱き合った時間は何にも表せない時間だった。昨年末に日本代表に合流し、うまく馴染めるか不安でいっぱいの中、共に戦ってきて最高の結果を出すことができ本当に嬉しかった。チーム一丸となり勝ち取ったオリンピック出場権獲得、アジア予選優勝は、私にとって貴重な体験となった。

地元の氷見に帰省すると、両親、恩師、ハンドボール関係者、友人など多くの方から「おめでとう」、「感動をありがとう」と言ってもらえてとても嬉しかった。このハンドボールの聖地氷見と言う最高の環境で育ち、ハンドボールに出会えたことに改めて心の底から感謝したい。

このパリ五輪出場権獲得はまだまだ通過点。メダルを絶対に獲得したい。そして日本のハンドボールのファンに夢と感動を与え、日本でハンドボールがもっとメジャーになるように頑張っていきたい。



## 史上初！アジア競技大会 金メダル

北原 佑美

令和5年10月に中国・杭州で開催されたアジア競技大会に出場し、男女を通じて初となる金メダルを獲得することができました。そのチームの一員として戦えたことを非常に誇りに思います。

大会の約1ヶ月前には、パリオリンピックのアジア予選が広島県で行われましたが、宿敵・韓国に1点差で敗れ、パリの出場権を手にすることはできませんでした。多くの時間と努力を費やし、たくさんの方々の支援や協力をいただいていたこともあり、この予選にかける思いは非常に強いものでした。そのため、敗北後は気持ちを切り替えるのが難しかったです。

「リベンジ」という目標を胸にアジア競技大会に臨みましたが、序盤は納得のいく試合をなかなか展開できませんでした。特に、地元中国との試合では、物凄いアウェイの雰囲気の中、前半はリードを許してしまいました。しかし、チーム全員で粘り強く戦い、後半には逆転し、最終的に1点差で勝利を収めることができました。

今回の大会では多くの課題も見つかりましたが、苦しい状況でも勝利に繋がれたことは大きな自信となりました。そして、決勝の韓国戦ではチームメイトの活躍が光り、10点差をつけて見事勝利することができました。念願の「リベンジ」を果たせたことは本当に嬉しく思います。同時に、少しの悔しさも残っていますが、パリオリンピック出場という目標に向けて、これからも努力を続けていきたいです。

今回の大会を通して感じたことは、結果を残すことで日本のハンドボール界をさらに盛り上げられるということ、そして、これまでの取り組みが間違っていなかったという確信です。もちろん、楽しいことばかりではありませんでしたが、チームメイトがいたからこそ乗り越えることができました。この点において、団体競技の強みを存分に活かせたと思います。

今後、ハンドボール界を担う若い選手たちには、さらに日本のハンドボールを盛り上げ、ぜひ日本代表を目指してほしいと願っています。簡単な道ではありませんが、「今」を全力で頑張ることで、自分でも想像できないような「未来」が待っているはずです。



## チャレンジあるのみ！

男子実業団チームの創設は、氷見市におけるハンドボール競技の普及発展の歴史において最大の課題でした。恩師故金原至先生は、1980年代に教え子でオリンピック選手だった西山清氏を監督にチーム創設を試みましたが、夢はかないませんでした。以降、多くのハンドボール関係者たちの話題には上っても、誰かが行動を起こすまでには至りませんでした。

そんな中で2018年に安平光佑選手を擁する氷見高校男子ハンドボール部が高校三冠を達成し、日本の高校ハンドボール史上最強のチームが誕生しました。チームを総監督としてマネジメントしたのが、徳前紀和先生です。徳前先生は「この機を逃したらトップチーム創設は不可能」と判断し、チューリップテレビの松井克仁氏の協力を得て、県内有力企業のリーダーに熱っぽくチーム創設を語り、次々と賛同を得ていきます。並みならぬハンドボール愛とビジネス感覚をもった指導者（教員には珍しい）とマスコミの営業トップが組んで、2019年に最強の選手たちを核にしたチーム「富山ドリームス」をつくり、大学トップ3と戦わせ、見事に優勝します。2日間で4600人を集客した伝説の大会『ハンドボーラーズDAY2019』です。この興行成功で2人はトップチームの成功を確信します。

2020年1月11日、大会運営を先導した徳前紀和先生と金原理博先生がトップチーム創設の話を私に持ち掛け、代表就任を要請します。銀行員だった私は非現実的な構想に半ば失敗を予測しながらも、2人の情熱に押され、チャレンジを選択しました。資金繰りについてはまったく想像すらできませんでしたが、7月の法人化を目指して「走る」ことを決意し、大会役員29人をそのまま社員に移行させました。

ここからが奇跡の連続です。ビジネスマンに

## 富山ドリームス代表理事 指崎 泰利

としては痛快この上ない出来事の連続でしたが、3月の新日本リーグ代表理事の葦原一正氏を皮切りに、7月の法人設立記念にはBリーグチェアマンの島田慎二氏、9月にはリオ五輪女子柔道金メダリストの田知本遥さん、翌2021年6月に前スポーツ庁長官の鈴木大地氏と、立て続けに大物講演会を成功させます。

「ドリームスはただものではない。こいつらは本気だ！」という感覚が経営者に伝わったのか、現在のユニフォームスポンサーの大手数社から「デュアルキャリア」（アスリート人材の地元就職）支援の確約を受けます。当時、雇用企業先との勤務条件交渉などは全く考えてもいない状況下でした。

8月には不可能とも思えた、日本リーグ参加企業である(株)豊田合成から吉村晃監督の招聘（総務省の「地域活性化起業人」制度を活用）に成功し、翌2022年には筑波大学、明治大学を招いて富山ドリームスとともに合宿事業を展開、8月と11月にハンドボーラーズDAYを開催、12人の選手を9つの企業に就職させて4月1日にチーム創設、そして2023年7月から念願の日本リーグに参戦します。

スポンサー企業はメインの日本ゼオンをはじめ、富山銀行、大越仏壇など27社、選手雇用企業は17社（うち氷見市内の企業は7社）におよび、さらに拡大しつつあります。

スタッフは全員が二足のわらじで活動していたのですが、日本リーグ参戦となるとさすがにバックオフィス業務が追いつかなくなり、女性事務員を2人雇いました。2023年には(株)アジアブリッジの人材マッチングシステムを活用し、幹部候補として田中一郎氏と契約しました。

選手たちは様々な企業で普通に仕事をしながらハンドボールトップチームに在籍し、いずれの

分野でもトップを目指す「デュアルキャリア」方式を受け入れています。雇用企業の理解を得て毎日4時に仕事を終え、5時から練習していますが、この方式が全国の若者たちの賛同を得、毎年10名以上の選手が自らの意思で富山ドリームスに加わってきています。人件費は雇用企業が負担しますので、富山ドリームスの負担はチームの運営経費のみとなり、大勢の選手を抱えることができます。

これまでに培った県内企業と選手とのマッチングノウハウは今後、ハンドボール競技だけにとどまらないアスリート人材マッチング事業として株式会社化し、さらに大きく育てる予定です。

2022年12月には氷見市との包括連携協定を結び、地域における様々な課題の解決に協同して取り組むことを確認しました。春中ハンドへのスタッフ派遣もその一環ですが、最近では2024年2月にNTT西日本と氷見市ボランティア総合センターの協力を得て、県内外の高校生ハンドボーラーを対象に、能登半島地震災害ボランティア活動と富

山ドリームスによるハンドボールクリニックを同時開催しました。

チャレンジを決断した4年前からは考えられない展開になってきましたが、監督の問題、選手の問題、お金の問題、バックオフィスの問題、行政の問題と、何度も何度も危機的な状況に追い込まれながらも、都度、誰かが現れて助けてくれたり、何か事件が起きて解決したり、どう考えても「神様が助けてくれている」としか思えません。「これだけ多くの危機を乗り越えてきた富山ドリームスというチャレンジが失敗するはずがない」という根拠レスの信念が常に私たちを後押しします。あとはどれだけ成長するか。私たちはどんなに困難に思える課題であっても、あえて『チャレンジ』を選択します。そして今まで誰も想像できなかったような、地域を豊かにするビジネスを創り出します。新会社設立や国際交流も含め、近い将来、びっくりするようなことがいくつも起こるはずです。どうか今後の富山ドリームスの挑戦にご期待ください。

## 志士奮迅

森 康陽

高校3年生の時に選抜大会とインターハイに出場しましたが、いずれもベスト8止まりで、メダルを手にすることはできませんでした。その結果に満足できず、大学でもハンドボールを続けようと考えましたが、地元・氷見から離れることが想像できず、地元に残ることに決めました。

社会に出て2年が経とうとした頃、大学へ進学した同級生たちの活躍がSNSで目に留まりました。彼らが自分の知らない世界で活躍していることを知り、羨ましさを感じると同時に、自分はこのままで良いのかと自問自答する日々が続きました。

そんな中、半年後にハンドボール雑誌を開いた時、トライアウトの記事が目飛び込んできました。その瞬間、「これだ!」と直感し、すぐに両親にその思いを伝えました。1度諦めた世界へ再び挑戦できるのは今しかない、この思いを快く後押ししてくれた両親には深く感謝しています。福岡県での挑戦が決まり、知り合いのいない新しい環境に飛び込んだ時、不安と恐怖が押し寄せました。ひとりになると涙が止まらないこともありましたが、「やるしかない」と自分に言い聞かせ、前に進みました。

ゴールデンウルヴス福岡というチームに4年間在籍しました。トップリーグに参加し、実際に試合をする中で、その世界が決して簡単なものではないことを痛感しました。各年代のトップ選手が集まる中で、どう生き残るか試行錯誤した日々は、非常に貴重な経験となりました。

福岡での生活が4年目に差し掛かった頃、氷見で新しいチームができると聞き、恩師である徳前先生に連絡を取りました。氷見に恩返しをしたいという思いを伝え、チーム「富山ドリームス」の理念である、ハンドボールだけでなく地域貢献にも力を入れるという方針に共感し、氷見に戻るこ

とを決意しました。

発足当初は13名で、6対6の練習ができない状況でしたが、吉村監督の指導のもと、基本トレーニングと個人スキルの向上に専念しました。普段行ったことのないトレーニングに取り組むことは非常に新鮮で、常に学ぶことの大切さを再認識しました。

これまで様々なハンドボールの経験を積んできましたが、最も誇れるのは、氷見でハンドボールを始めたことです。どの体育館でもハンドボールができ、小さい頃から高いレベルの中で競技に打ち込める環境があるのは、全国でも珍しいことだと思います。また、どのカテゴリーでも1対1を重視する文化は、先輩方が大切に次世代へ繋いできた宝物だと感じています。私自身も、しっかりとその文化を守り、氷見のハンドボールを次世代へと繋げていきたいと思っています。

最後に、氷見で育ったハンドボーラーたちが富山ドリームスに集結し、氷見を盛り上げていく、そのような環境を築けるよう、これからも頑張っていこうと思います。



# 氷見市ハンドボール協会 役員表 (■は現役員)

会 長	徳 前 啓 人	平成13年～19年
	田 嶋 靖 夫	平成20年～28年
	■ 谷内口 数 尚	平成29年～現在
副 会 長	沢 武 哲 也	平成6年～22年
	池 淵 清	平成13年～22年
	稲 積 忠 勝	平成13年～22年
	田 嶋 靖 夫	平成18年～19年
	久 保 範 子	平成6年～30年
	南 条 絹 江	平成6年～令和2年
	松 田 憲 蔵	平成19年～令和4年
	上 秋 美	平成19年～26年
	指 崎 泰 利	平成15年～30年
	林 外 美	平成27年～令和4年
	金 原 理 博	令和3年～4年
	矢 田 晃 章	令和3年～4年
	■ 堂 尻 繁	平成29年～現在
	■ 姿 豊 晴	平成29年～現在
	■ 中 山 光 広	平成31年・令和元年～現在
	■ 瀬 戸 茂	平成31年・令和元年～現在
理 事 長	松 田 憲 蔵	平成15年～18年
	瀬 戸 茂	平成19年～30年
	金 原 理 博	平成31年・令和元年～2年
	櫻 打 佳 浩	令和3年
	■ 江 幡 元 伸	令和4年～現在
副理事長	瀬 戸 茂	平成13年～18年
	金 原 理 博	平成17年～30年
	上 秋 美	平成18年
	矢 田 晃 章	平成29年～令和2年
	櫻 打 佳 浩	平成29年～令和2年
	■ 大 石 克 哉	平成19年～現在
	■ 桶 家 秀 介	令和3年～現在
	■ 竹 内 美 樹	令和3年～現在
事 務 局 長	大 石 克 哉	平成13年～18年
	干 場 秀 和	平成19年～平成30年
	■ 川 田 貴 史	平成31年・令和元年～現在

## 成績年表

### 《小学校》

年度	大会名	男子		女子	
		出場チーム	結果	出場チーム	結果
2005	第18回全国小学生ハンドボール大会	窪スポーツ少年団ハンドボール部	ベスト8	上庄ハンドボールクラブ	ベスト8
2006	第19回全国小学生ハンドボール大会			上庄ハンドボールクラブ	優勝
2007	第20回全国小学生ハンドボール大会	上庄ハンドボールクラブ		窪スポーツ少年団ハンドボール部	優勝
2008	第21回全国小学生ハンドボール大会	窪スポーツ少年団ハンドボール部	準優勝	仏生寺スポーツ少年団	優勝
2009	第22回全国小学生ハンドボール大会	上庄ハンドボールクラブ	3位	仏生寺スポーツ少年団	優勝
2010	第23回全国小学生ハンドボール大会	窪スポーツ少年団ハンドボール部	ベスト4	仏生寺スポーツ少年団	準優勝
2011	第24回全国小学生ハンドボール大会	窪スポーツ少年団ハンドボール部	ベスト8	上庄ハンドボールクラブ	3位
2012	第25回全国小学生ハンドボール大会	窪スポーツ少年団ハンドボール部	準優勝	窪スポーツ少年団ハンドボール部	ベスト8
2013	第26回全国小学生ハンドボール大会	氷見ハンドボールジュニア		十三ジュニアハンドボールクラブ	
2014	第27回全国小学生ハンドボール大会	H C 宮田		比美乃江ハンドボールクラブ	準優勝
2015	第28回全国小学生ハンドボール大会	上庄ハンドボールクラブ	3位	H C 宮田	3位
2016	第29回全国小学生ハンドボール大会	窪スポーツ少年団ハンドボール部		比美乃江ハンドボールクラブ	
2017	第30回全国小学生ハンドボール大会	比美乃江ハンドボールクラブ		十三ジュニアハンドボールクラブ	優勝
2018	第31回全国小学生ハンドボール大会	比美乃江ハンドボールクラブ	ベスト8	十三ジュニアハンドボールクラブ	
2019	第32回全国小学生ハンドボール大会	窪スポーツ少年団ハンドボール部	準優勝	比美乃江ハンドボールクラブ	3位
2020	第33回全国小学生ハンドボール大会	開催中止		開催中止	
2021	第34回全国小学生ハンドボール大会	H C 宮田	準優勝	窪スポーツ少年団ハンドボール部	
2022	第35回全国小学生ハンドボール大会	窪スポーツ少年団ハンドボール部	ベスト8	H C 宮田	
2023	第36回全国小学生ハンドボール大会	H C 宮田	準優勝	十三ジュニアハンドボールクラブ	

《中学校》

年度	大会名	男子		女子	
		出場チーム	結果	出場チーム	結果
2005	第34回全国中学校ハンドボール大会	西條中学校	ベスト8		
		北部中学校	ベスト8		
	第1回春の全国中学生ハンドボール選手権大会	北部中学校 南部中学校	ベスト8	十三中学校 南部中学校	
2006	第35回全国中学校ハンドボール大会	北部中学校	準優勝	十三中学校	
	第2回春の全国中学生ハンドボール選手権大会	南部中学校 北部中学校	ベスト8	南部中学校 西條中学校	
2007	第36回全国中学校ハンドボール大会	南部中学校	準優勝		
	第3回春の全国中学生ハンドボール選手権大会	南部中学校 西條中学校	3位 ベスト8	北部中学校 十三中学校	3位
2008	第37回全国中学校ハンドボール大会	西條中学校			
	第4回春の全国中学生ハンドボール選手権大会	北部中学校 南部中学校		北部中学校 南部中学校	準優勝
2009	第38回全国中学校ハンドボール大会	南部中学校		北部中学校	3位
	第5回春の全国中学生ハンドボール選手権大会	北部中学校 南部中学校		西條中学校 南部中学校	ベスト8
2010	第39回全国中学校ハンドボール大会	南部中学校		西條中学校	準優勝
	第6回春の全国中学生ハンドボール選手権大会				
2011	第40回全国中学校ハンドボール大会	西條中学校 南部中学校	3位	十三中学校 西條中学校	ベスト8
	第7回春の全国中学生ハンドボール選手権大会	北部中学校 南部中学校	3位	十三中学校 西條中学校	準優勝
2012	第41回全国中学校ハンドボール大会	南部中学校		十三中学校	3位
	第8回春の全国中学生ハンドボール選手権大会	西條中学校 北部中学校	3位	十三中学校 西條中学校	
2013	第42回全国中学校ハンドボール大会	西條中学校	準優勝	十三中学校 西條中学校	
	第9回春の全国中学生ハンドボール選手権大会	北部中学校 西條中学校	準優勝	北部中学校 西條中学校	
2014	第43回全国中学校ハンドボール大会	北部中学校			
	第10回春の全国中学生ハンドボール選手権大会	西條中学校 北部中学校	優勝 準優勝	十三中学校 西條中学校	ベスト8 準優勝

年度	大会名	男子		女子	
		出場チーム	結果	出場チーム	結果
2015	第44回全国中学校ハンドボール大会	西條中学校 南部中学校	優勝	十三中学校	
	第11回春の全国中学生ハンドボール選手権大会	北部中学校 南部中学校	ベスト8 ベスト8	十三中学校 北部中学校	3位
2016	第45回全国中学校ハンドボール大会	北部中学校 南部中学校	優勝	十三中学校	
	第12回春の全国中学生ハンドボール選手権大会	西條中学校 北部中学校	3位	十三中学校 北部中学校	ベスト8 準優勝
2017	第46回全国中学校ハンドボール大会	北部中学校		北部中学校	ベスト8
	第13回春の全国中学生ハンドボール選手権大会	北部中学校 南部中学校	3位	西條中学校 十三中学校	
2018	第47回全国中学校ハンドボール大会	北部中学校	ベスト8	西條中学校	
	第14回春の全国中学生ハンドボール選手権大会	北部中学校 西條中学校	3位	十三中学校 北部中学校	3位 ベスト8
2019	第48回全国中学校ハンドボール大会	北部中学校	3位		
	第15回春の全国中学生ハンドボール選手権大会	開催中止		開催中止	
2020	第49回全国中学校ハンドボール大会	開催中止		開催中止	
	第16回春の全国中学生ハンドボール選手権大会	北部中学校 西條中学校	優勝	西條中学校 十三中学校	3位 3位
2021	第50回全国中学校ハンドボール大会	北部中学校	準優勝	十三中学校	3位
	第17回春の全国中学生ハンドボール選手権大会	西條中学校 北部中学校		十三中学校 北部中学校	準優勝
2022	第51回全国中学校ハンドボール大会	西條中学校 北部中学校	ベスト8	十三中学校 北部中学校	3位
	第18回春の全国中学生ハンドボール選手権大会	西條中学校 SKC氷見		北部中学校 西條中学校	ベスト8
2023	第52回全国中学校ハンドボール大会	西條中学校		北部中学校	3位
	第19回春の全国中学生ハンドボール選手権大会	西條中学校	優勝	西條中学校	

《高校》

年度	大会名	男子		女子	
		出場チーム	結果	出場チーム	結果
2005	第56回全日本高等学校ハンドボール選手権大会				
	第29回全国高等学校ハンドボール選抜大会	氷見高校			
2006	第57回全日本高等学校ハンドボール選手権大会	氷見高校			
	第30回全国高等学校ハンドボール選抜大会	氷見高校			
2007	第58回全日本高等学校ハンドボール選手権大会	氷見高校	ベスト8		
	第31回全国高等学校ハンドボール選抜大会	氷見高校		氷見高校	
2008	第59回全日本高等学校ハンドボール選手権大会	氷見高校			
	第32回全国高等学校ハンドボール選抜大会	氷見高校	ベスト8	氷見高校	
2009	第60回全日本高等学校ハンドボール選手権大会			氷見高校	ベスト8
	第33回全国高等学校ハンドボール選抜大会	氷見高校		氷見高校	
2010	第61回全日本高等学校ハンドボール選手権大会	氷見高校			
	第34回全国高等学校ハンドボール選抜大会	氷見高校			
2011	第62回全日本高等学校ハンドボール選手権大会	氷見高校			
	第35回全国高等学校ハンドボール選抜大会	氷見高校		氷見高校	
2012	第63回全日本高等学校ハンドボール選手権大会	氷見高校			
	第36回全国高等学校ハンドボール選抜大会	氷見高校			
2013	第64回全日本高等学校ハンドボール選手権大会				
	第37回全国高等学校ハンドボール選抜大会	氷見高校	ベスト8	氷見高校	3位
2014	第65回全日本高等学校ハンドボール選手権大会	氷見高校	ベスト8		
	第38回全国高等学校ハンドボール選抜大会			氷見高校	

年度	大会名	男子		女子	
		出場チーム	結果	出場チーム	結果
2015	第66回全日本高等学校ハンドボール選手権大会				
	第39回全国高等学校ハンドボール選抜大会			氷見高校	
2016	第67回全日本高等学校ハンドボール選手権大会				
	第40回全国高等学校ハンドボール選抜大会	氷見高校	3位		
2017	第68回全日本高等学校ハンドボール選手権大会	氷見高校	準優勝		
	第41回全国高等学校ハンドボール選抜大会	氷見高校	優勝	氷見高校	
2018	第69回全日本高等学校ハンドボール選手権大会	氷見高校	優勝		
	第42回全国高等学校ハンドボール選抜大会	氷見高校	ベスト8	氷見高校	
2019	第70回全日本高等学校ハンドボール選手権大会	氷見高校		氷見高校	
	第43回全国高等学校ハンドボール選抜大会	開催中止		開催中止	
2020	第71回全日本高等学校ハンドボール選手権大会	開催中止		開催中止	
	第44回全国高等学校ハンドボール選抜大会			氷見高校	
2021	第72回全日本高等学校ハンドボール選手権大会				
	第45回全国高等学校ハンドボール選抜大会	氷見高校		氷見高校	
2022	第73回全日本高等学校ハンドボール選手権大会	氷見高校			
	第46回全国高等学校ハンドボール選抜大会	氷見高校		氷見高校	ベスト8
2023	第74回全日本高等学校ハンドボール選手権大会	氷見高校	3位		
	第47回全国高等学校ハンドボール選抜大会	氷見高校		氷見高校	

《一般》

年度	大会名	男子		女子	
		出場チーム	結果	出場チーム	結果
2005	第10回ジャパンオープン トーナメント	氷見クラブ	ベスト8		
2006	第11回ジャパンオープン トーナメント	氷見クラブ			
2007	第12回ジャパンオープン トーナメント	氷見クラブ	ベスト8		
2008	第13回ジャパンオープン トーナメント	氷見クラブ きときとクラブ			
2009	第14回ジャパンオープン トーナメント	氷見クラブ きときとクラブ	3位	氷見クラブ	
2010	第15回ジャパンオープン トーナメント	きときとクラブ			
2011	第16回ジャパンオープン トーナメント	氷見クラブ		氷見クラブ	ベスト8
2012	第17回ジャパンオープン トーナメント	氷見クラブ			
2013	第18回ジャパンオープン トーナメント	氷見クラブ			
2014	第19回ジャパンオープン トーナメント	氷見クラブ	ベスト8		
2015	第20回ジャパンオープン トーナメント				
2016	第21回ジャパンオープン トーナメント	氷見クラブ			
2017	第22回ジャパンオープン トーナメント	氷見クラブ			
2018	第23回ジャパンオープン トーナメント				
2019	第24回ジャパンオープン トーナメント				
2020	第25回ジャパンオープン トーナメント	開催中止		開催中止	
2021	第26回ジャパンオープン トーナメント	開催中止		開催中止	
2022	第27回ジャパンオープン トーナメント			氷見クラブ	
2023	第28回ジャパンオープン トーナメント	開催中止		開催中止	

## 編集後記

---

本誌の編集にあたり、まず初めに氷見市ハンドボール協会70周年を迎えることができたのは、多くの方々のご支援とご協力のおかげであることを、心より感謝申し上げます。

70年という長い歴史の中で、私たちの協会は多くの挑戦を乗り越え、発展を遂げてきました。先人たちが築き上げた基盤の上に、現在のメンバーや関係者がハンドボールというスポーツを通じて地域に貢献できる場を広げ続けております。これまでの歩みを振り返りながら、未来への希望と展望を胸に、さらに一歩前進していく所存です。

本誌では、協会の歴史や多くの方々の貴重な証言をまとめさせていただきました。これが、次世代のハンドボール選手たち、そしてこのスポーツに関わる全ての方々にとって、何かしらの励みとなり、参考となれば幸いです。

最後になりますが、これまでご尽力いただいた全ての皆様に、改めて心より感謝申し上げますとともに、今後とも氷見市ハンドボール協会への変わらぬご支援とご協力をお願い申し上げます。

## 編集委員

---

編集委員長：谷内口数尚

編集委員：姿 豊晴、堂尻 繁、中山 光広、瀬戸 茂、櫻打 佳浩  
江幡 元伸、大石 克哉、桶家 秀介、竹内 美樹、川田 貴史

令和6年11月発行

編集／氷見市ハンドボール協会70周年記念誌編集委員会  
発行／氷見市ハンドボール協会  
印刷／(有)AT企画印刷





氷見市ハンドボール協会

HIMI HANDBALL ASSOCIATION

Since 1954



<https://himi-handball.jp>